

2020年度 地域創造学環フィールドワーク報告会にあたって

新型コロナウイルスの感染拡大防止により昨年度は報告書のみの書面開催にとどまりましたが、今年度は対面開催をすることができました。地域社会や経済活動を一変させた事態の収束は未だみえないままですが、私たちは苦しみの中でも、変化をいとわず新しい生活を創造するしなやかさを発揮することができていると実感しています。

さて、フィールドワーク報告会も第5回となりました。この地域創造学環の歩みは、学生たちに学びの場を提供していただくフィールドの皆さまとの連携と協働の歴史です。自治体の方、企業・民間活動団体の方々をはじめ、地域の皆さまに大変お世話になりました。ここに深く御礼申し上げます。

2020年度の学環のフィールドワーク活動は大きく形を変えました。活動そのものの中止や延期が相次ぐ中、刻々と変動する状況に合わせ、移動手段や宿泊方法、活動内容の修正を試みてきました。オンラインでの活動や座学による地域研究の深化など、フィールドの方たちと学生たちが「今、そしてこれからできること」を模索した活動になっています。静岡県内14箇所、16テーマの活動の中には、地域創造学環開設以来の長期にわたる実践が行われているフィールドも多く、その変遷もまたご覧いただきたいと思います。

今回の報告会は、今後の地域課題の変容とそれへの「取り組みの在り方」が問われる機会でもあると考えます。新型コロナウイルス感染症の拡大がもたらした生活意識・行動の変化、社会・経済の構造的変容はさまざまな「格差」を顕在化させています。家族やコミュニティの人間関係の変容と分断、社会的弱者と呼ばれる層の拡大、教育機会の不平等、情報化に取り残されるリスク、極端な経済活動の変化にともなう活用資源の偏りなど枚挙に暇がありません。今こそ、地域と大学が力を合わせ、様々な領域・立場の人が境界や分断を乗り越えるための対話を重ね、地域の課題解決を進めることが期待されます。皆さまには引き続き学生たちの歩みを温かく見守りつつ、ご指導くださいますよう心からお願い申し上げます。

なお、地域創造学環のホームページ (<http://www.srd.shizuoka.ac.jp/>) には、学生の参加に基づくフィールドワーク情報が提供されています。報告会・報告書とは別の面もぜひ、ご覧いただければ幸いです。

2021年5月20日

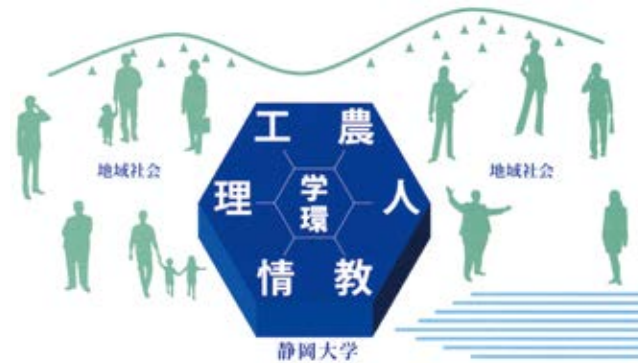
国立大学法人静岡大学
地域創造学環長
江口 昌克

目 次

地域創造学環とは／フィールドワークの取り組み	2
地域創造学環のフィールドワーク／フィールドとテーマ	3
2020年度フィールドワーク報告 ※表記の学生の学年及び教員の職位等は2020年度のもの	
静岡市 清水港周辺地域	4
静岡市 庵原地区	6
静岡市 駒形・おまち	8
静岡市 浅間通り商店街	10
焼津市 浜通り	12
浜松市 浜松文芸館	14
浜松市 佐久間町	16
田園空間博物館 南遠州とうもんの里	18
御前崎市	20
松崎町 商店街	22
松崎町 観光と防災	24
東伊豆町	26
伊豆半島ジオパーク 保全と防災	28
伊豆半島ジオパーク 教育	30
県営団地	32
学内地域連携拠点	34
2020年度に2年半の活動を終えた学生たちからの声	36
フィールドワークにご協力いただいている地域のみなさまからの声	40

地域創造学環とは

静岡大学地域創造学環とは、平成28年4月にスタートした従来の学部枠組みを越えた新しい全学学士課程横断型教育プログラムです。静岡大学のすべての学部（人文社会科学部、教育学部、情報学部、理学部、工学部、農学部）の授業を履修することができます。幅広い教養と高い専門知識を身につけながら、積極的に地域（フィールド）に飛び出し、より魅力的な地域社会の創造に取り組むことができる人材を育成します。



フィールドワークの取り組み

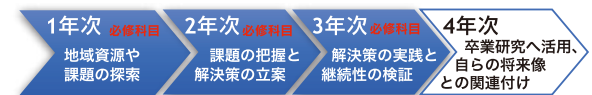
現在16テーマで、地域の方々と交流しながら地域の課題や資源を発見・探求し、課題解決のための提案や実践を行っています。

地域創造学環のフィールドワークの特徴

- ① 地域に密着した体制により、地域の実情と課題に正面から対峙
- ② 3コースを融合したグループを編成し、異分野が結束して取り組む
- ③ 縦の繋がりを重視し1年次から3年次をひとつのチームとする
- ④ 単年度ではなく、中長期的に地域と関わり、信頼関係を醸成

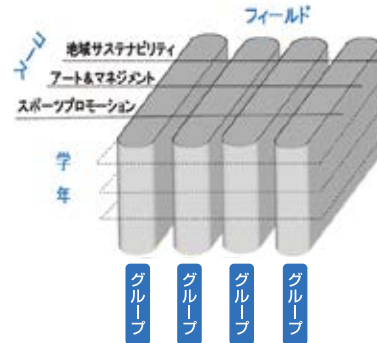
フィールドワークの年次別到達点設定

フィールドワークは単年度完結ではなく、数年間にわたり地域及び関係者と連携しながら課題解決に取り組めます。



コース融合のグループ編成

コース、入学年という枠にこだわらないグループ編成でフィールドワークを行います。



※2020年4月から「地域サステナビリティコース」、「アート＆マネジメントコース」、「スポーツプロモーションコース」の3コース制に再編いたしました。2019年4月までは、「地域経営コース」、「地域共生コース」、「地域環境・防災コース」、「アート＆マネジメントコース」、「スポーツプロモーションコース」の5コース制が適用されています。本報告書では、「地域サステナビリティコース」の学生を、コースの中の「地域経営」「地域共生」「地域環境・防災」の各分野に分けて記載しています。

地域創造学環のフィールドワーク／フィールドとテーマ

静岡市

清水港周辺地域

浜田・清水地区の情報発信とおもてなしによる交流・活動人口の増加



駒形・おまち

駒形通りと「おまち」のにぎわい創出



県営団地

多世代の居場所づくりと地域福祉資源のネットワーク



庵原地区

地域資源を活かした食・スポーツによる地域活性化



浅間通り商店街

浅間通り商店街のにぎわい創出



焼津市

焼津市浜通り

地域住民と高校生との交流に基づいた地域づくり活動



学内地域連携拠点（静岡大学静岡キャンパス）

静大発 地域と大学の連携を広めよう！



伊豆半島ジオパーク 保全と防災

伊豆半島ジオパークにおける環境保全と防災対策



伊豆半島ジオパーク 教育

伊豆半島ジオパークの持続可能な開発と教育（SDGs／ESD）の推進



東伊豆町

新しい観光スタイルの発掘・創出プロジェクト



松崎町 商店街

なまこ壁が残る松崎町商店街のにぎわい創出



松崎町 観光と防災

防災と観光の両立



浜松市

浜松文芸館

若者の文芸離れを食い止めよう



佐久間町

暮らし体験で交流の環づくり



掛川市

田園空間博物館 南遠州とうもろの里

子どもたちを呼び込むための環境づくり



御前崎市

御前崎市

御前崎スポーツ振興プロジェクト～スポーツによる交流人口の拡大と産業振興の推進～



静岡市 清水港周辺地域

浜田・清水地区の情報発信とおもてなしによる交流・活動人口の増加

メンバー

(アート&マネジメント) 3年 玉木絢女
(スポーツプロモーション) 3年 上田七珠、長谷川恭平、2年 大川原翔、深井康平、本田悠、
1年 合田千夏、澤田美咲、鈴木美優
指導教員：○准教授 石川宏之、特任教授 岩田孝仁
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
有限会社都市環境デザイン研究所

地域概要

清水港周辺地域（以下「本地域」という）は、雄大な富士山や紺碧に輝く駿河湾といった自然景観を背景とした美しい地域である。港周辺には「エスパルスドリームプラザ」と呼ばれる複合商業施設や駿河湾の海産物を味わうことのできる魚市場「河岸の市」等があり、魅力的な観光資源を豊富にもった地域と言える。港湾には大型外国客船も寄港するため世界中から観光客を呼び込むことができることも特徴である。地域内には港関連企業、商店街や区役所、住宅が立地する。その中で清水次郎長の生家や清水港船宿記念館「末廣」などの歴史文化施設も点在し、歴史ある港まちであることがうかがえる。しかし現在は人口減少、少子高齢化現象や新型コロナウイルスによる観光客の減少による影響を受け賑わいや活気に欠けている。



清水港の様子

これまでの活動

① 入江地区・浜田地区・日の出地区のまち歩き

② 静岡市立清水浜田小学校にアンケート調査

③ ミナトブンカサイの見学



ちびまる子ちゃんランドでの記念写真

④ SWOT分析・クロス分析から考えた地域課題の設定

①について

地域の現状把握を目的として3つの地区を実際に自分たちで歩いて調査した。調査によって、地区ごとの特徴、観光資源の発見や、本地域が抱える情報発信不足や、地域資源間のつながり不足などの諸種の課題が明らかになった。

②について

本地域の未来を担う世代である小学生が、自分たちの住む街にどのような思いを抱いているかを調査することで、自分たちで見つけた課題との相違確認や今後の提案に向けての情報を収集することができた。

③について

ミナトブンカサイは、大学生が中心となって企画・運営する旧清水三保線沿道の倉庫群の保存と活用を目的としたイベントである。それらを見学することで自分たちが今後イベントを企画する上で必要となる課題を発見することに繋がった。

④について

人口統計整理や収集した情報から地域内の「強み・弱み・機会・脅威」を分析し、本地域が持つ課題を抽出した。

2020年度の活動について

① 事例研究レポートを活かし、課題解決の情報共有に利用

新型コロナウイルスの影響で前期はフィールドワークを実施できなかった。その中で、各自が地域活性化に関する国内の成功事例を調査し、これまでに抽出した課題を解決するための「事例研究レポート」を作成した。後期の活動ではそれらを分析し、本地域の課題解決に役立つヒントを整理することで、自分たちが検討していくために情報共有した。

② 4施設のヒアリングによる地元認識との相違点発見

後期には「河岸の市」「駅前銀座商店街」「ちびまる子ちゃんランド」「ま・あ・る」の4施設を見学し、代表の方にヒアリングを実施した。各施設が抱える問題と地区が持つ課題を照らし合わせ、地元認識と実状のズレや問題点を見つけ出した。

③ 実現可能性のある取り組みの創出・提案

事例研究レポートや施設ヒアリングの内容を踏まえ、課題解決に向けた取り組みについて検討し、自分たちが学んだことや特技等を活かした「商店街の空間を利用したスポーツイベント」や「景観の良さを活かしたウォーキングプログラム」などの実現可能性のある具体的な提案素案をまとめた。



清水魚市場「河岸の市」の様子



話し合いのまとめ図

これから取り組むべきこと

① 今後行なっていく取り組みの具体化 【にぎわう】

今年度の活動を通して挙げられた課題に対しての解決策として、現段階で実現可能性のあると思われる取り組みを具体的に構築し、実際にスポーツイベントや企画を実施していくことを目指す。スポーツプロモーションの学生が集まっていることから、「スポーツ・運動」を通して地域課題を解決するための第1歩となる取り組みとしたい。

② 地域内の情報共有・発信力を高める 【ひろがる】

本地域が持つ課題の一つとして情報発信力が弱いことがわかった。河岸の市や駅前銀座商店街、エスパルスドリームプラザなどの集客施設がある中でそれらの魅力を効果的に発信し、共感を得ることで清水港周辺地域全体に活気にぎわいが生み出され则认为した。そのためには自分たちにはどのようなことができるのか、誰と一緒にやることでもっと効果が上がるのかなどを深掘りしていく検討を行いたい。

③ 市民活動団体やNPO、行政などに関わる 【つながる】

これまでのフィールドワークでは地域課題解決に外部組織や大学などと連携活動する機会があったが、諸事情などからそうした活動をしてこなかった。しかし、多様化・複雑化する地域課題を解決するための取り組みを行なっていく上で他の団体や組織、大学との連携・協働が必要となる場面も出てくる。様々な人たちと協働することで自分たちの活動の幅も広がり、活動内容も充実していくことが期待できる。我々自身の活動や情報を発信し、我々を知ってもらい、協働できる環境を整えていきたい。

静岡市 庵原地区

地域資源を活かした食・スポーツによる地域活性化

メンバー

(地域経営) 1年 佐藤啓介
(アート&マネジメント) 3年 岸山莉子
(スポーツプロモーション) 3年 植松舞、木村心香、竹端勇人、2年 小野田泰地、神原悠輔、
木川静、巽文花、山口理生、山地菜月、1年 勝又すず花、
藤波千暖、宮川智也、油井菜夏

指導教員：○准教授 村田真一、准教授 杉山卓也、特任助教 川崎和也

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

公益財団法人静岡市まちづくり公社
庵原地区連合自治会

地域概要

庵原地区は、静岡市清水区の北部に位置する。人口は約1万人、総世帯数は約3千世帯である。県内の中でもみかんとお茶の生産が特に盛んで、多くの茶畑とみかん畑が広がっている。また、清水ナショナルトレーニングセンター（以下、トレセン）や庵原球場などのスポーツ施設が充実している。そこでは、プロサッカーチームやプロバスケットボールチームのキャンプ・合宿が盛況であり、東京オリンピック・パラリンピックの拠点としても期待されている。このような背景から庵原地区は、“食”と“スポーツ”が主な地域資源と考えられる。翻って近年は、静岡市全体で人口流出、高齢化が問題になっているが、それは庵原地区も同様の傾向にある。これらの問題を解決するために、アクティブシニアを促すための施策が求められ、それらを通じた魅力あるまちづくりが求められている。そこで現在、庵原地区では、地域資源の再発掘を通じたまちづくりを目指して、様々なコミュニティ活動が展開されている。私たちのフィールドワークもその意図に賛同し、「地域資源を活かした食・スポーツによる地域活性化」というテーマの基、活動を行っている。



高山から眺めた庵原地区全景

これまでの活動

これまで（特に2019年度）は、住民のスポーツ活動状況を把握し、そこから生活・暮らしの改善に資する基礎資料を得るために、「庵原地区住民の運動・スポーツ活動に関する実態調査」の企画・実施・分析・報告を主な活動として行った。

実施に際しては、庵原地区自治会を構成する19の自治会にご協力を頂き、全戸（2683戸）に配布した（一戸につき一票）。その結果、1903の有効回答票を得ることができた。そして、それを集計・分析し、住民の方へ報告・説明を行いながら、実際にどのような施策が必要とされるかの検討を行った。つまり、庵原地区のスポーツ資源に着目しながら、日常的な課題に迫るものであった。

まず、調査の分析から分かった主要なポイントは、「1年間に運動・スポーツをほとんど実施していない住民が60%にのぼる事」「クラブや教室に通って運動をする住民はごく少数だが、自由時間に一人で運動をしている人は一定数いる事」「トレセンをスポーツ活動として利用する人は依然少ないものの、レストランとして活用している住民は一定数いる事」「トレセン利用者が少ない理由には、プロ選手しか使えないというイメージが多少ある他、そもそも住民がスポーツを実施していないからだという事」「庵原の自慢事として、『トレセンや庵原球場がある事』を認識している住民が高い割合を占める事」などであった。

また、庵原地区連合自治会の会議で調査結果について報告を行ったところ、住民の方々から以下のような指摘を受けた。それは、「庵原だけでなく他の地域データなどとも比較してみたらどうか」「住民の健康状態を加味したデータ分析が今後必要なのではないか」「庵原の自然地形を活かしたスポーツ施策等が考えられるのではないか」などのコメントであった。これらの意見を踏まえ、引き続きさらなる分析を継続し、地域住民と共に具体的な課題解決策を模索する事となった。

2020年度の活動について

2020年度の活動は、前年度までの調査結果を基に2つの活動を中心に行った。それは、住民の方々と一緒に庵原について熟議する“庵原座談会”の開催と、住民のスポーツ活動を喚起するために計画されたスポーツツアーの検討であった。

まず、庵原座談会については、庵原地区の課題と今後の展望についてフリーディスカッションを実施した。4回の開催となったが、それぞれ、「庵原地区全般について」「スポーツにおける課題とは」「具体的な施策提言」「アンケート結果報告第2弾、質疑応答」などをテーマに実施された。少人数のグループに分けて行ったこともあり、内容の濃い意見交換が図られた。話し合いでは、「山や川などの自然を活かし住みやすさを重視したいという意見」や「トレセンをより住民にとって活用できるようにインフォメーションの工夫・開発が必要であること」、「子ども達のスポーツ離れの原因について」、「庵原地区における、そもそものスポーツ基盤について」などの意見が出た。スポーツ基盤については、子ども達が参加できるスポーツの教室の開催数・実態、子ども達が遊べる公園が少なくなっていることなどが課題に挙げられた。今後、これらの課題をどのように解決していくかが重要となる。

次に、スポーツツアーの検討を行った。スポーツツアーとは、トレセンや庵原球場を拠点として行う、住民のスポーツ活動のきっかけ作りとなるためのイベントや定期教室を指す。本年度は、本格的なツアー開催に向け、その課題点を抽出した。具体的には、プレススポーツツアーと題して、連合自治会体育会役員の方を対象としたミニイベントを実施した。プレツアーで行った内容は、体力測定、ノルディックウォーキング体験、地産を活かしたランチ提供・ミーティングであった。プレツアーの企画段階では、トレセン（運営体：静岡市まちづくり公社）職員の方や、地元団体との連携・協力の難しさや大切さを学ぶことができた。また、実施に向けた詳細な事業計画の作成や活動内容の適切性については、緻密さに欠ける反省点もあったので改善をしていきたいと思います。さらに、体育会役員の方から、体験した上での感想・指摘や日頃より地域でスポーツ事業を展開する上での課題点を伺うことができた。これらの課題点を基に、次年度から本格化を目指しているスポーツツアーの開催に向けた企画・作業を急ピッチで進めたいと思う。また、現在はコロナ禍の状況もあるため、感染症対策に関する内容についてもしっかり取り組む必要を再認識したい。

これから取り組むべきこと

まずは、本番となるスポーツツアー開催に向けて準備を進めていきたい。現時点では、連合自治会体育会役員の方にご協力をいただきながら、ツアー実施上のリハーサル、問題点の共有が図られた段階である。体育会の方から頂いた意見や自分たちで見つけた課題を修正し、庵原地区のスポーツ基盤づくりに貢献していきたい。そのためにも、改めて、2019年度に実施された「庵原地区住民の運動・スポーツ活動に関する実態調査」結果や、2020年度の活動として行った庵原座談会の意見を整理する必要がある。また、これらの活動に加えて、庵原地区の詳細に迫った施策や提言が望まれる。つまり、庵原地区を構成する19自治会の位置関係やそれぞれの歴史・風土、課題に応じた個別対応が重要となるのではないか。そのためにも、それぞれの自治地区を訪問し聞き取り調査を継続することによって、各地区課題の異同について究明したい。さらに、マップ作りを通して「木を見て森をも見る」地域活性化の視点が重要だと考えている。



“座談会”におけるグループごとの議論



プレススポーツツアーの様子



プレツアーで出された学生考案のランチメニュー



庵原地区を構成する“各地区”の地形・風土を考慮した施策の展望（学生作成）

静岡市 駒形・おまち

駒形通りと「おまち」のにぎわい創出

メンバー

(地域経営) 4年 岡本怜音、1年 武田小真智、中野萌
(地域共生) 3年 岡本敦、黒田千晴、2年 出木美沙緒
(アート&マネジメント) 4年 濱嶋ななみ、2年 渡邊紗也佳
(スポーツプロモーション) 1年 西村実紗

指導教員：○准教授 井原麗奈、特任教授 平岡義和、教授 伊藤文彦、
准教授 高橋智子

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

駒形通四丁目商店街のみなさま
静岡市葵区城西地域包括支援センター
静岡おまちバル実行委員会

地域概要

駒形通四丁目商店街

駒形通四丁目商店街は、静岡市葵区にある商店街である。多くの店舗の営業時間が9:00～18:00であり、商店街内はトリコロールのアーケードが印象的。お客さんの高齢化や人通りの少なさが大きな課題となっている。昨今こういった課題を解決するため「こまち会」(現在：コマカツ)という組織が発足し、イベントの開催等を通して、地域の活性化を目指している。

静岡おまちバル

おまちバルとは「おまち」と呼ばれる呉服町、両替町、七間町、常盤町、紺屋町を中心に開催されるイベントである。静岡市に飲食店が多いことに注目し、それらを地域資源として捉え、ブランディングによる地域振興を目指している。

これまでの活動

◆認知症サポーター養成講座

城西地域包括支援センターで、包括支援センターについてや地域が抱える問題についての話を聞き、認知症についての事前学習を行った。その上で大学に講師を招いて、学内にて認知症サポーター養成講座を開催。当日は40名(うち教職員5名)が参加し、地域の中で認知症サポーターとして自分たちに何ができるかを学んだ。



認知症サポーター養成講座

◆インタビュー調査

駒形通四丁目商店街でインタビューを行った。商店街の店主の皆さんを対象に「こまち会(現在：コマカツ)」に対しての認知度や商売をしている上で困っていることについて調査をし、その結果を商店街にフィードバックした。このインタビューによって、こまち会や駒形通り商店街が抱える問題点を、よりはっきりさせ、共有することができた。

◆おまちバルでの活動

静岡のおまちで毎年2回開催されている「静岡おまちバル」の実行委員の方々に大学に招いて事前学習を行ったのち、静岡おまちバル(2019, 秋)に参加した。その後、学生主体のコンセプトバルを行うことを目標に設定し、次のおまちバルに向けた実行委員会の例会へ参加し、おまちバルの活動に加わりながら学びを深めた。



駒形通四丁目商店街



静岡おまちバル

2020年度の活動について

◆駒形通四丁目商店街での活動

①ごちそうマート駒形の見学、および研究発表会の参加

静岡商業高校主催であるごちそうマート駒形の見学をし、高校生と地域の方々の交流や、自分たちとは違うマーケットという形での駒形通の活性化の仕方を見ることができた。研究発表会ではそれぞれの班の発表を聞き、高校生の視点から見た駒形通、その活性化のためのアプローチ方法を学ぶことができた。

②例会の参加

駒形通商店街の一丁目から五丁目までを総括する「コマカツ」という団体の、月に一度開かれる例会に継続的に参加し、駒形通の状況の把握や取り組みを見学した。例会で話された内容はフィールドメンバーの中で共有し、おまちバルの活動と比較しながら学びを深めた。

◆おまちバルでの活動

静岡おまちバル実行委員の方々に大学に招き、「おまちバル」についての事前学習を行なった後、実際に静岡おまちバル(2019, 秋)に参加した。そこから学生主体のコンセプトバルを行うことを目標に設定し、実行委員会の例会へ加わりながらイベント開催に向けての学びを深めた。

①例会の参加

おまちバル実行委員会の例会に参加し、イベント開催に向けて学生ができる活動を提案したり、アドバイスをもらったりして学びを深めた。また、おまちバルが抱える「若い世代の参加客が少ない」という課題を解決するため、学生によるチラシの配布や学割などの対策方法を提案した。

②電子ブック、チラシの作成

例会で提案した学生向けの学割チラシの作成をするともに、電子ブック作成の手伝いを行った。

③静岡おまちバル体験

イベント当日は、学生としておまちバル(2020, 秋)に参加するとともに、抽選会の手伝いなどといったイベント運営を経験した。運営側と参加者側の両者の立場でイベントに参加することで、準備の苦労や参加しての感想などから見てくるものもあり、課題解決とコンセプトバル開催に向けて視野を拡大することが出来た。



ごちそうマート駒形での出店の様子



静岡商業高校でのフィールドワーク活動発表の様子



おまちバル体験



おまちバル抽選会のお手伝いの様子

これから取り組むべきこと

これまで駒形・おまちフィールドは2つのフィールドで活動を行っていたが、2021年度からは駒形でのフィールドワークを終え、おまちでのフィールドワークを中心にして活動を行っていく。おまちでの活動は、主におまちバル実行委員会の方々と協働して活動を行っていく予定である。今までは、おまちバルのイベントに向けて参加店舗の情報収集や、アンケートの集計などといった情報の整理を中心に行っていた。しかし、2021年度からはコンセプトバルという新しく開催予定のイベントに向けて、テーマ設定や企画など、学生主体で実行委員会の方々と一緒に企画面の活動をしていきたい。また、これまで通り実行委員会の例会にも積極的に参加していく予定である。新型コロナウイルス感染拡大もあり、イベントの開催が難しくなる可能性もあると思うが、そのような中でどのような管理を行い、感染防止に努めるべきなのかを活動を通じて学ぶとともに、新型コロナウイルスの影響で落ち込んでいる静岡の街の支援と振興を目指したい。

静岡市 浅間通り商店街

浅間通り商店街のにぎわい創出

メンバー

(地域経営) 3年 加藤秋沙、森智徳、2年 増田末夢、山梨純怜、
1年 増田裕奈、三浦真
(地域共生) 4年 青木佑未、1年 嶋村安純
(アート&マネジメント) 3年 今西真紀、田中真衣、前田春香、2年 上倉朋子、高橋美貴、
萩原亜祐実

指導教員：○特任教授 平岡義和、准教授 川原崎知洋

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

静岡浅間通り商店街振興組合

地域概要

静岡市中心部に位置する静岡浅間神社から、駿府城公園方面の中町交差点までを結ぶ600メートルの「浅間通り」に存在する商店街。かつては浅間神社の門前町、または駿府城下町として静岡の産業、流通の中心地であったが、百貨店やコンビニの進出、通信販売の普及等による客の減少で20年ほど前から衰退が始まっている。平日の昼間でも人通りは少なく、シャッターが下りたままの店が目立つ。

しかし、毎年秋には静岡とタイの交流事業としてこの地に生まれタイに渡って活躍した「山田長政」にちなんだ長政まつりが開催されており、多くの観光客が訪れる。また、毎月1日に浅間神社で行われている安倍の市にも、野菜やお菓子などを目当てに地元の方が集まり、賑わい創出の場となっている。



平日の商店街

これまでの活動

3班（制作班・広報班・マップ班）を新たに構成し、活動を行った。

長政まつり

日本とタイの交流の架け橋となった浅間通りにゆかりのある山田長政にちなんで行われているお祭り。子ども広場という遊びの場を運営し、「地面におえかき」や天候に関わらず楽しめる「塗り絵」などを企画・運営した。制作班はインスタ映えするフォトスポットの制作に取り組んだ。



長政まつり「地面におえかき」の様子

輪くぐりさん

浅間神社境内に設置される大きな茅の輪をくぐり無病息災を祈る行事。浅間神社の門前町である商店街でも輪くぐりさんに合わせ、様々なイベントが開催される。商店街の事務所をお借りし制作班主導で行われた七夕飾り企画では、子どもを対象にしたプラ板工作を行った。短冊と共に子どもたちのプラ板が笹に飾られ、商店街を彩った。広報班ではFacebookを利用し、輪くぐりさんに向けてのカウントダウンの記事を掲載した。また、子ども向けのチラシを制作した。

まち歩き

上級生が下級生に浅間通り商店街を詳しく紹介する商店街ツアーや商店街の新たな魅力探しを行った。



輪くぐりさんでの七夕飾り企画

2020年度の活動について

コロナ禍でイベントが中止になったので、以下のような取り組みを行った。

新メンバーとフィールド探索（2020/10/30）

新メンバーの4人に対して上級生がフィールドを案内した。上級生による歴史的、観光的視点の解説や商店街の方からのお話を通してフィールドへの理解を深めることができた。最後の振り返りでは今後の活動への期待の声があふかった。



上級生から解説を聞いている様子

新たなマップの作成

マップ班が浅間通り商店街のマップをリニューアルした。商店街の店舗に変更（増減）があるため、商店街の依頼に応じて改訂作業を行っている。

PR動画の制作・編集

より幅広い層へ商店街の魅力を伝えるために動画制作を行った。12月に行った商店街の飲食店への取材と撮影を基に編集を進め、完成に至った。



PR動画の一部

コロナ禍での取組み 企画立案

コロナ禍において安心安全に活動できる企画を考えた。学生と商店街の方との話し合いの結果、商店街が所有する足元灯を飾りつける企画を進めることになった。足元灯は商店街が16台所有している腰位の高さの照明器具で、下部が行灯になっており夜になると点灯される。また、上部が展示台となっており、透明のガラスカバーで囲われているため写真や小さいオブジェなどを飾ることができ、自由度が高いこともわかった。よって、商店街が所有する足元灯のディスプレイを季節ごとに企画・設置することに決まった。商店街の方にこれまでに飾られていたものについて説明を受け、学生が提案するデザイン案に対するアドバイスをいただきながら、どのようなディスプレイが商店街を華やかにすることができるのか、案をさらに練り上げていきたい。



商店街に点在する足元灯

これから取り組むべきこと

PR動画の制作・編集

現時点での制作内容を更にブラッシュアップし、フィールドワークメンバーや商店街の方に意見を伺う。その後、商店街のホームページやFacebookへの掲載許可をいただき、可能であればYouTubeでも公開する。

足元灯ディスプレイ企画の考案

浅間通り商店街に複数ある「足元灯」の装飾やディスプレイ内容を考案する。デザインが固まり次第、試作案として実際に足元灯に装飾を施す。また、装飾に使用できそうな場合、浅間神社の御利益をモチーフとしたキャラクターを考案する。

浅間通り商店街でのイベント

今までの活動の中で参加してきた「輪くぐりさん」や「長政まつり」などのイベントに、コロナ禍の状況に応じて参加し、商店街の方々のお手伝いをする。

焼津市 浜通り

地域住民と高校生との交流に基づいた地域づくり活動

メンバー

(地域経営) 3年 坂井朝陽、宮嶋洋仁、2年 佐々木啓人、武田琴奈、
1年 芝原一貴、仲宗根利恵
(地域共生) 3年 山口桃花、1年 松本侑
(スポーツプロモーション) 2年 山口みどり
指導教員：○准教授 太田隆之、教授 橋本誠一
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

焼津市行政経営部政策企画課
焼津市交流推進部観光交流課
NPO法人浜の会
静岡県立焼津水産高等学校
やいづ観光案内人の会

地域概要

浜通りは、駿河湾沿岸にあった街道を中心に形成された、南北に1kmほど続く集落である。集落内には、かつて運河としても機能した堀川が北へと流れている。北浜通・城之腰・鰯ヶ島の3地区に分かれており、魚商人が築いてきた沿岸部特有の伝統的家屋や小路などの焼津の歴史と文化が豊富にある地域である。例として、明治時代に怪談小説で名の知れた、小泉八雲が滞在し多くの作品をこの地に残した。また、歴史的資産だけでなく、地区ごとの夏祭りや「あかり展」などの伝統的な行事が多く存在しているが、人口減少や少子高齢化の影響から、参加者が減少傾向となっており、存続が危惧されている。浜通りの町並みの保存や活性化を目指して浜通り活性化フォーラムが組織され、活動が行われている。



図1 浜通りの様子

これまでの活動

- ・浜通り活性化フォーラムの皆さんとワークショップを行い、旧服部家の利活用に関して議論した。
- ・毎年夏に開催される「あかり展」で来場者に対して「あかり展」の取り組みや浜通りの印象などを問うアンケート調査を実施した。
- ・焼津水産高校の模擬会社「魚国」の出店イベントに参加し、来場者に対して「魚国」の活動や浜通りの印象などを問うアンケート調査を行った。
- ・同校流通情報科3年生とワークショップを行い、焼津に対して印象や上記の「魚国」でのアンケート結果について意見を交換した。



図2 焼津水産高校でのワークショップの様子

2020年度の活動について

2020年度はCOVID-19の流行により活動が大幅に制限されたが、中でも地域の方の協力を得てフィールドワークを実施する事ができた。
今年度中に行った主な活動は以下の通りである。

🐟 まち歩き

『やいづ観光案内人の会』の方に焼津市浜通りのこれまでの経緯についてご講義いただくとともに、浜通りの案内をしていただいた。
資料だけではわからないその土地特有の雰囲気を感じるとともに、かつて漁業のまちとして栄えた名残が風化していることへの寂しさも感じ、この地域の今後の課題を発見・共有することができた。

🐟 焼津水産高校とのリモートによるワークショップの実施

例年は焼津水産高校に訪問し、フィールドワークメンバーがファシリテーターとして高校生のグループに参加してワークショップを行ってきたが、今年はコロナ禍の状況を踏まえてZOOMを使用してリモートで実施した。私たちが把握していなかった高校生ならではの視点からの市の課題も挙がり、今後の活動において非常に参考となる意見をいただいた。



図3 やいづ観光案内人の会の方々による浜通りの説明を受ける様子



図4 かつて女性たちが航海の安全を祈っていた神社

これから取り組むべきこと

2020年度は、まち歩きやリモートディスカッションなどの調査に取り組んだ。そこで今後の活動では、これらの活動で得られた情報を整理・共有し、そこから浜通りの活性化のためにどのような活動を行えばいいのかを考え、実践することが求められる。そこで今後は次のようなことを行う。

- ・リモートディスカッションで得られた情報を学生間で共有し、整理する。
- ・リモートディスカッションで得られた情報を「やいづ観光案内人の会」をはじめとする、まちづくりに携わる人々に報告する。
- ・浜通り活性化の一環としてこれまで議論してきた旧服部家(空家)のリノベーションが終わり、新しい建物が完成した。この建物を活用した活性化の取り組みに大学生の立場からどのように関わることができるのか、検討する。
- ・浜通りの魅力を高めていくために、具体的にどのようなことを行えば良いのか考え、実践する。

浜松市 浜松文芸館

若者の文芸離れを食い止めよう

メンバー
 (地域経営) 3年 尾本優里香
 (地域共生) 3年 齋藤紫苑
 (アート&マネジメント) 4年 古川綾乃、2年 半田颯太、松本愛子
 1年 中野真白、増元明日菜
 指導教員：○講師 占部史人、准教授 井原麗奈
 ※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
 公益財団法人浜松市文化振興財団浜松文芸館

地域概要

浜松文芸館は、平成27年4月よりクリエート浜松内の4階および5階フロアの一部に移転し、リニューアルオープンした施設です。館内では浜松市や遠州地方ゆかりの文芸作家の資料を収集・保存しており、郷土の生んだ優れた文芸作家の業績を次世代へと引き継ぎ市民文化の向上を図るため、これらの文芸人の収蔵品の平常展・企画展を開催しています。また、俳句、文学史、言葉などの広い文芸分野をテーマにした講座の開催を通じて、身近に文芸を学ぶ・楽しむ場、文芸に触れ、多くの人々と語り合う場にふさわしい環境づくりを進めています。



これまでの活動

【1年目】1年目（2017年度）は浜松文芸館の知名度を上げることを目的として広報に力を入れ、ポスターやチラシの作成を行いました。これからはずっと使い続けられるようなポスターを目指し、写真撮影やキャッチコピーの作成に当たりました。作成したポスターは新聞にも掲載され反響を呼びました。

【2年目】2年目（2018年度）は若者に文芸の楽しさを知ってもらうことを目標として、2つのワークショップを開催しました。対象を中高生と小学生に分け、中高生には合作俳句、小学生には宝探しや物語の穴埋めを中心とした企画を行いました。2019年3月には文芸館の一部をお借りし、一般の方に向けて浜松文芸館フィールドの活動を紹介する展示を行いました。

【3年目】3年目（2019年度）は言葉に対して親しみを持ってもらうことを目標として、七夕と俳句をテーマにしたワークショップを開催しました。小学生高学年を対象として、子供たち一人一人に夏の俳句を詠んでもらい、願いのこもった俳句を短冊に書いて飾るというイベントです。企画後のアンケートでは前向きなコメントが多く、子供たちに俳句を楽しんでもらえたイベントになりました。また、後期では文芸館に興味を持ってもらい、5階まで足を運んで頂くことを目的として、クリエート浜松1階に文芸館の紹介コーナーを作成しました。パッと目を引く等身大パネルの作成、合作俳句をもとにした「俳句ガチャ」の企画を主に行いました。特に「俳句ガチャ」は子供でも気軽に楽しく参加することができ、1階と5階にガチャ機を設置したことによって子供の文芸館への来場を増やすことができました。リピーターも増えてきたため、この企画は継続的に行っていききたいと思います。



2020年度の活動について

今年度の活動として、昨年度の俳句ガチャを踏まえて、浜松文芸館での思い出を持ち帰ることのできるグッズを制作することとなり、浜松文芸館や合作俳句、オリジナルキャラクターについての説明が載っている冊子と、冊子と連動した遊びを入れたクリアファイルを企画しました。

クリアファイルのデザインは、表面が黒の縦縞模様のシンプルなものとなっており、裏面は、縞模様を基調とした中に、浜松や文芸館にちなんだものをちりばめた市松模様と青海波を取り入れたものとなっています。また、クリアファイルに冊子を挟み、冊子を横にスライドさせると、表紙の絵が動いているように見える「スリットアニメーション」を取り入れました。

冊子の内容としては、1ページ目では、1つの句を3人で作る合作俳句を、浜松文芸館のキャラクターと動物たちが漫画で説明しています。2ページ目では、昨年度等身大パネルを作った「俳人（はいと）くん」と、今年度から新しく加わった「ことばちゃん」の2人のキャラクターのイラストや、クリアファイルのスリットアニメーションのやり方、浜松文芸館の紹介文などを掲載しています。また、裏表紙は作った俳句を自由に書き入れられるスペースが用意されており、作った俳句が額に飾られ、それを俳人くんやことばちゃんが眺めているような構図になっています。昨年設置した俳句ガチャでは作った俳句を手元に残せないことが課題となっていたため、冊子に書き込めるようにし、さらに、クリアファイルに冊子を入れても外から見えるようにクリアファイルの裏側は枠のサイズで透明になっています。

このクリアファイルと冊子は俳句ガチャの景品として配られています。

さらに、昨年度から引き続き俳句ガチャの季語カードの制作を行いました。季節ごとの季語と簡単な説明、イラストを交え、子供にもわかりやすいものとししました。



上から、クリアファイル、冊子（表紙・裏表紙）、冊子（1, 2ページ）、季語カード

これから取り組むべきこと

これからの目標として、浜松や文芸にちなんだワークショップイベントの企画を考えています。そのためにも、まず学生自らが浜松や文芸について学び、研究や制作を繰り返していく必要があります。そこで、浜松の歴史や文化、文芸について学内でのディスカッションや浜松の街での吟行や俳画などの体験を通して学び、また、浜松文芸館が主催するワークショップに参加者側、スタッフ側としてそれぞれ参加することを計画しています。

そうした学生自身の学びとワークショップの経験を生かしたワークショップの開催によって、多くの人が浜松文芸館で文芸に触れる機会を創出していくことを目指します。

浜松市 佐久間町

暮らし体験で交流の環づくり

メンバー

(地域経営) 2年 清水良香、1年 齋藤しずく、竹田有那
(地域共生) 3年 新井七津奈、2年 伊藤響、河合美智香
(アート&マネジメント) 2年 服部翔子、1年 落合歩美
(スポーツプロモーション) 3年 魚住和未、龍谷遥
指導教員：○教授 江口昌克、教授 河合学、准教授 山本崇記、
特任助教 川崎和也

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

浜松市天竜区佐久間協働センター
佐久間パンプキンレディース

地域概要

浜松市天竜区佐久間町は天竜川の上流に位置する山間地域である。人口は2,985人(令和3年4月1日現在)である。

佐久間の魅力は豊かな自然、地元で受け継がれている多くの民話、戦後開発の歴史を持つ佐久間ダムなどの歴史的財産などである。そのため、佐久間町は【歴史と民話の郷】とも呼ばれている。

また、NPOや地域団体の活動も盛んである。地域イベント【フェスタさくま】では、五平餅などの名産品や地元の農作物が販売され、地域団体の一つである「パンプキンレディース」の方々が地域の名物お菓子などを販売する。

人口減少や高齢化などの地域課題を抱える中で、地域団体の活力や住民の交流が佐久間町の地域社会を担っている。

これまでの活動

①交流の環づくり

佐久間地域内外のイベントに参加し、地域の方々のお手伝いを通じ、交流や佐久間の魅力が伝わる活動を行った。

②情報発信

佐久間地域内の情報を発信するために学生が発見した佐久間の魅力を広報誌『サクッとさくま』で発行した。

③「ごまちゃん」、「ごまび」づくり

佐久間の女性による食品加工グループ「パンプキンレディース」さんが製造する「ごまちゃん」、「ごまび」の製造や販売のお手伝いを行った。

2020年度の活動について

今年度は新型コロナウイルスの影響によって現地での活動は1度も出来なかった。そのため、現地に行かなくても出来る活動を考え、座学や情報収集、情報発信を中心に実行してきた。

【サクッとさくまの発行】

これまでの活動と同様に『サクッとさくま』を前期と後期に発行した。前期・後期の活動報告と共に、前期は学生メンバー紹介、後期はごまちゃん・ごまび製作の内容を中心に掲載した。また、多くの人に気軽に佐久間の情報を提供するために、これまでの紙媒体に加えて地域創造学環のホームページでの閲覧も可能にした。



佐久間の自然



サクッとさくま8かじりめ
佐久間の魅力



パンプキンレディースさんとの活動

【Instagramの開設】

佐久間での活動の振り返りと佐久間町について新1年生に知ってもらうためにInstagramを開設した。Instagramには、メンバー紹介や観光、自然、鮎釣りなど佐久間の様々な魅力を掲載している。

【地図の作成】

イベントでの地域住民の方との交流を通して、様々な場所で活動させていただくにあたり、情報整理が必要になった。そこで、これまで活動してきたことや場所をまとめたオリジナルの佐久間町の地図を作成した。

【読書会】

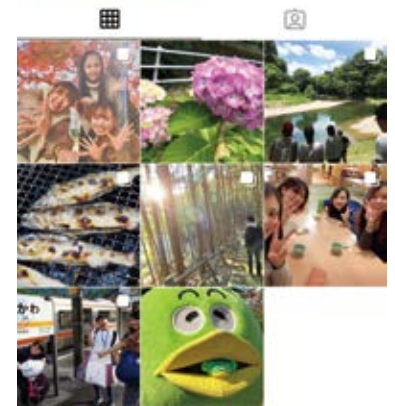
佐久間の歴史を知るため、週に一度読書会を行った。文献は『開発の時間開発の空間 佐久間ダムと地域社会の半世紀』(町村敬志稿、2006年、東京大学出版会)である。各章を分担しレジュメを作成、共有した。佐久間町に至った背景や歴史を振り返り、佐久間の過去について全員の共通理解を深めていった。また、新1年生は現地での活動が一度もできていないため、事前学習として参加した。

【ごまちゃん、ごまび製作】

これまでの現地実習でパンプキンレディースさんと共に製作してきた「ごまちゃん」、「ごまび」を製作した。マスクの着用や最小限の人数で製作するなどコロナ対策を講じながら実施した。

製作過程を「サクッとさくま」に掲載することで現地に行かなくても佐久間を体験できる方法を提案した。また、佐久間や「ごまちゃん」、「ごまび」のアピールにも繋げた。

地域創造学環



佐久間フィールドのInstagram



学生が製作したごまちゃん、ごまび

これから取り組むべきこと

●地域住民との交流

これまでの活動で築いてきた交流関係を維持する。

さらに、イベントで積極的に交流を図り、新たな関係の構築を考えている。具体的には今後、学生との交流機会を設けていきたい。そうすることで幅広い年代との交流の環づくりを目指す。

●『サクッとさくま』

大学構内や現地での配布の数と機会を増やし、多くの人の目に触れるように工夫をする。

また、広報誌を地域住民と作成し、さらに記事の内容を充実させていく方法も模索していきたい。

●SNSによる情報発信

現在運営中であるInstagramの現状分析を行う。

具体的にはInstagramのターゲットを明確にし、それを踏まえフォロワー数・年齢層、投稿に対する反応の調査を考えている。

●地図の作成

昨年度情報整理のために作成した地図を外部向けに改良し、広報誌に掲載できる形にする。イラストを入れたり、場所に対する情報を詳しく記載したりなど、より見やすい地図を目指す。

●ポスターの作成

広報誌以外にも気軽に佐久間を知るきっかけづくりとして、ポスターの作成を検討中である。大学構内での掲載を考えている。

田園空間博物館 南遠州とうもんの里

子どもたちを呼び込むための環境づくり

メンバー

(地域経営) 3年 朝倉大翔、2年 矢五田萌加
(地域共生) 3年 溝下紗里奈、宮地珠妃、2年 秋山航、清水彩香、
1年 生駒亮仁
(地域環境・防災) 1年 村岡蒼太
(アート&マネジメント) 3年 星野未佳、2年 芳村日苗、1年 舟山海里
(スポーツプロモーション) 4年 嶋村浩直、2年 漆畑奈々花、1年 宮本幸輝
指導教員：○教授 日詰一幸、教授 池田恵子、特任助教 川崎和也 ※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

NPO法人とうもんの会
蓮舟寺のみなさま

地域概要

「田園空間博物館 南遠州とうもんの里 総合案内所」(以下とうもんの里)は、掛川市の西南部にある施設である。広大な田園風景が広がっており、その風景は、南遠州地域の言葉で「稲面(とうも)」 「田面(たおも)」を意味する「とうもん」と呼ばれている。とうもんの里は、美しい田園風景や豊かな自然、農村の伝統文化の魅力と価値を見直して活用し、次世代に継承するために、静岡県田園空間整備事業によって整備され、2007年に誕生した。

掛川市から指定管理者の認定を受けてとうもんの里を運営するのが、2006年に地域住民らが中心となって設立した「NPO法人とうもんの会」である。とうもんの会は、とうもんの里を拠点にして、農業体験、食加工体験、地域文化のPRやイベント企画、地域の農水産物・加工品のPR販売などの活動を行っている。こうした活動を通じて、地域の農業や農村の魅力を伝え、とうもんの里を訪れる人々とのふれあいを創り、農業の保全や地域の活性化につなげていくことを目的としている。



とうもんの里と「笑子や」



とうもんの会の方々



地域の皆さんに向けた活動報告会

これまでの活動



【とうもん図鑑】

子どもたちが探検家となって、とうもんの里や周辺の自然を自由に観察し、発見した植物や生き物を絵に描いて、図鑑として共有するプロジェクト。



【きーもんらんど】

とうもん図鑑と同日開催。未就学児ととうもん図鑑の参加者を対象に、クイズ・スポーツ・音楽ブースを作り、子どもたちが自然に触れるきっかけとなる遊び場を提供した。



【横須賀まち歩き】

とうもんの里を初めて訪れる1年生が、とうもんの里周辺を歩き、自然や文化を感じた。お気に入りの風景や、自分の地元と比較して違うところなどを発見する機会となった。



【遊具製作】

竹ボウリングや竹ぼっくり、水鉄砲など、自然のものを利用した遊具を製作した。常設の遊具のため、長期的に子どもたちを呼び込む環境づくりに繋がった。

2020年度の活動について

【2020年度の活動目標】

とうもんの会では、とうもんの里を拠点にして、田園風景の保存と農村の伝統文化の継承などを目的とした活動をしている。とうもんの会がターゲットのひとつとしている、「農業を知らない子どもたち」の施設利用はそれほど多くなく、いかに次世代を担う子どもたちを呼び込むかが課題である。こうした課題から、私たちは、フィールドワークの全体テーマを『子どもたちを呼び込むための環境づくり』と定めて、活動を継続している。

昨年度のフィールドワークの活動による、子どもたちの遊びの観察結果から、子どもたちを呼び込む魅力的な遊びには**遊んだ様子が『かたち』として残る 同伴者も楽しむことができる 子どもの知識や腕前を発揮できる 親が撮影できる**という4つがポイントになることを発見した。

そこで今年度は、『**昨年の観察・分析結果を生かした遊びを実践**することで、子どもたちにとうもんの里を楽しんでもらう、「とうもん」の自然や文化に興味を持ってもらうといった様々な経験を通して、**とうもんの里にまた来たいと思ってもらうようなきっかけづくり**に繋げること』を目標とした。

【テーマ】

『子どもたちを呼び込む環境づくり』の実現

【2020年度の目標】

昨年度の観察・分析結果を活かした遊びの実践により、子どもたちがとうもんの里にまた来たいと思ってもらえるようなきっかけを創造する

【取り組んだこと】

企画・準備

オンラインや短時間の対面によるミーティングを行い、イベントへの話し合いを重ねた。現地に行く時間が限られていたので、とうもんの里でしか出来ないことを整理し、現地実習以外の時間も有効活用して「とうもんらんど」の準備に挑んだ。



5つのミッションをクリアして、親子でとうもんマップを完成させるというコンセプトの「とうもんらんど」を実施。笹舟づくり、野菜や動物の絵カード遊び、野菜のフォトフレームで写真撮影など、子どもたちがとうもんの里で自然に触れながら遊ぶことが出来る工夫を凝らした。

とうもんらんど

買い物調査

とうもんの里内にある直売所について、インタビュー調査や、駐車場・直売所内の観察を行った。直売所は、地域の農業や農村文化を守る場所でもあるため、直売所の利用に関する調査は、今後のとうもんの里の在り方を考える上で重要である。平均滞在時間や、利用の多い駐車場の場所、とうもんの里に対する声の報告と共に、レジ横の充実、歩きやすさの向上のための動線の確保なども提案した。



とうもんの里には、先輩フィールドワークメンバーが製作した、竹ぼっくりや水鉄砲、竹ボウリング、竹馬が置いてある。遊び道具を変わずに使い続けてもらえるよう、メンテナンスをした。色を塗りなおしたり、竹馬の紐を締め直したりして、今後も安全に楽しく遊んでもらえるようになった。

遊具メンテナンス

【成果】



①再度訪れたいと思うような環境の構築

- 写真フレームのような、来た人がいつでも使って楽しめる道具を作った。
- イベントにより、とうもんの里にある道具やモノの遊び方の周知ができた。
- 以前来たことがあるリピーターの増加などを含め、関係人口の増加が認められた。



②直売所の利便性の向上のための提案

調査結果を踏まえて、とうもんの会に「駐輪場がないため自転車で来た人が入り口に駐車している」ことを報告したところ、その後とうもんの里に自転車のスタンドが設置されることになった。

これから取り組むべきこと

①イベントの企画・実施

昨年度行った「とうもんらんど」から得た子どもに遊びを強制しないという気付きを活かし子どもを呼び込むための環境づくりにつながるようなイベントの企画・運営、または遊具の製作など学生同士で考えながら今後のフィールドワークを行っていく。

②買い物動向調査の実施

とうもんの里にある直売所に買い物に来た人へのインタビューや参与観察を通じてとうもんの里に地域住民が求めていることやとうもんの里が地域住民にとってどのような場所であるのかを調査する。

③とうもんの会・地域住民の方との関係性の深化

私たちが活動していく上で地域の方々との関係づくりは重要なことである。そのため私たち学生ととうもんの会の方々、さらには地域住民の方と今まで以上にコミュニケーションをとっていきたい。



御前崎市

御前崎スポーツ振興プロジェクト～スポーツによる交流人口の拡大と産業振興の推進～

メンバー

(地域経営)	3年	齋藤あい、1年	川村優和、杉山愛、脇坂大陸
(地域共生)	3年	中野希音	
(アート&マネジメント)	2年	永島幸奈	
(スポーツプロモーション)	3年	遠藤千穂、小西玲衣奈、萩原琢麻、平田直也、松井小春、	
	2年	島田朱諒、辻夢美、間下桃子、1年	府川駿介、
		宮崎純士郎	

指導教員：○特任助教 川崎和也、教授 水谷洋一、准教授 村田真一 ※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

御前崎市総務部企画政策課
静岡カントリー浜岡コース & ホテル
御前崎市観光協会

地域概要

御前崎市は、静岡市と浜松市のほぼ中間に位置する、静岡県内陸部最南端の自治体で、人口は約3万人である。

御前崎市には「浜岡砂丘」「御前埼灯台」のほか、「マリンパーク御前崎」「海鮮なぶら市場」「渚の交番」「あらさわふる里公園」など、さまざまな名所・施設がある。また年間日照時間が国内で最も長いなど、地理的特徴等を活かしたスポーツも盛んで、ウィンドサーフィンの世界大会も開催されている。

御前崎市もまた人口流出に伴う人口減少、少子高齢化、地域経済の縮小・衰退などが顕著である。2040年には住民の約4割が65歳以上の高齢者になると予想され、その結果、御前崎市の第一次・第二次産業の担い手が不足し、さらに地域コミュニティの希薄化などの問題が懸念される。こうした課題が山積するなかで、御前崎市では、①「働く場所がたくさんあるまちづくり」、②「来てよし住んでよしのまちづくり」、③「安心して出産・子育てができるまちづくり」、④「いまあるひと・ものを活用した安全・安心なまちづくり」を基本目標にして、市民・行政・企業などが連携しながら、地域づくりに取り組んでいる。

これまでの活動

「御前崎スポーツ振興プロジェクト」は、国と御前崎市との地方創生推進事業として2018年からスタートした事業である。市民・学生・企業・団体・行政などが連携し、御前崎市のスポーツ環境を活かして、交流人口の拡大、地域経済の活性化、市民活動の活性化、市民の健康増進などを図ることを目標としている。

私たちは「御前崎スポーツ振興プロジェクト」と連携して、2018年10月から御前崎市でフィールドワークを行っている。御前崎市を訪れて様々な施設・名所を視察したり、現地の方々から話をうかがったりしながら、これまで以下の活動に取り組んだ。

(1) マリンスポーツフェスタ（2019年7月14日）

毎年、御前崎港マリーナで開催されるマリンスポーツフェスタに参加し、カヌー、サップ、水上バイク、バナナボートなどのマリンスポーツを体験。スタッフとして運営のお手伝いもし、イベント運営のノウハウを実践的に学んだ。

(2) 御前崎市合宿型フィールドワーク（2019年9月25日・26日）

御前崎市で1泊2日の現地実習を実施。私たちが企画する「御前崎市に全国の大学生を集めるためのイベント」を実現するために、自転車での市内の各所を視察したり、私たちの企画について専門家の方々などからアドバイスをいただいたりした。

(3) 「U14御前崎NEXTA CUP 2019」でのイベント開催（2019年12月29日）

第2回U-14御前崎ネクスタカップで、全国からやって来る中学生たちにとって御前崎市での滞在がよい思い出となるように、キックターゲットの企画・運営および豚汁の提供を行った。



地域創造学環

2020年度の活動について

2020年度は約2年間に渡って準備してきた「御前崎市に全国の大学生を集めるためのイベント」を実現する年であった。しかし新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大によって、御前崎市を訪問する機会は非常に制限された。御前崎市を訪問できない間、私たちはオンラインを活用するなどして、御前崎市役所の方々などと企画の実現に向けた準備を進めてきた。

〈12月10日 御前崎市役所訪問〉

「御前崎市に全国の大学生を集めるためのイベント」として3月20日に実施する「おまえざきサイクラリー」や、2021年度以降の新たな企画として考えているフライングディスクを使ったイベントについての話し合いを行った。御前崎市役所の方々などから私たちのアイデアを実現するための様々なアドバイスをいただき、改善点などを明らかにすることができた。さらに、イベントを開催するために必要となる手続き、準備についても意見を行い、私たちの企画の実現に向けた準備を進めることができた。

また、1年生にとっては、初めての御前崎市の訪問ということで、御前崎市を代表するスポットである「浜岡砂丘」と「御前埼灯台」を訪れて、御前崎市についての理解を深めた。



〈3月20日 おまえざきサイクラリー〉

御前崎スポーツ振興プロジェクト、御前崎市役所、そして御前崎市観光協会などの協力を得て「おまえざきサイクラリー」を開催した。これは、私たちが考えた指令に従って御前崎市内のスポットを自転車で回りながら、ポイントやスタンプを集めて競うイベントである。当日は心配された天候にも恵まれて、御前崎市の内外から16名がイベントに参加してくれた。

当初は「御前崎市に全国の大学生を集めるためのイベント」として企画したが、大学生に限定せず、御前崎市内からも参加者を募ることにした。御前崎市外からの参加者には、このイベントをきっかけに御前崎市のファンやリピーターになって欲しいという思いで、御前崎市内からの参加者には普段の生活では知らなかった御前崎市の知って欲しいという思いで企画・運営を行った。イベントの準備の際に実際に足を運んで自分の目で見て感じたおすすめ場所や隠れたスポットをマップに組み込んだりすることを意識した。また、参加者以外にも御前崎市をPRするために、参加者が御前崎市内のスポットの写真をSNSに投稿するとポイントが加算されるなどの工夫を行った。

イベント参加者や協力してくださった地元の方々からは「またやって欲しい」「今後、地元の人向けや小学生向けのイベントもつくって欲しい」などの声をいただいた。0からのスタートだったこの企画は、計画から予算立て、スポット・景品の交渉など、実践的な学びを得ることができた。私たち御前崎フィールド全体としても次へと繋がる経験となった。



これから取り組むべきこと

これまで御前崎フィールドでは、御前崎市の外から人を呼び込むことに力点を置いて活動を行ってきた。今後も引き続きそれに取り組む一方で、2021年度は御前崎市の市民をターゲットにした活動の展開を検討している。具体的には、市民へのフライングディスク競技の普及活動を計画している。これは、御前崎スポーツ振興プロジェクトが御前崎市の外からのフライングディスクの競技者や愛好者らの誘致に取り組み始めたことを受けて、私たちは御前崎市の市民に向けて競技の普及に取り組むことで、「フライングディスクの聖地」という御前崎市の新たな地域イメージを構築し、御前崎市全体の活性化につなげたいと考えている。そのために、2021年度は御前崎市の市民に向けてのフライングディスクの体験会を企画運営し、どうしたらフライングディスクを御前崎市に根付かせることができるのかを検討していきたい。

松崎町 商店街

なまこ壁が残る松崎町商店街のにぎわい創出

メンバー
(地域経営) 3年 中西花、宮本彩名、2年 金瀧芽生、菅野惇、1年 山本みう
(地域共生) 3年 大谷知、2年 海老名香凜、辻村圭吾、1年 高橋奈那
(アート&マネジメント) 1年 稲垣望美
指導教員：○准教授 牛場智、教授 阿部耕也、教授 杉山康司
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
松崎町企画観光課
松崎町総務課
静岡県立松崎高等学校

地域概要

『花とロマンの里』 松崎町

静岡大学から車でおよそ三時間半、伊豆半島西部にある人口約6500人のこの町は、川沿いに咲き乱れる桜や田んぼを使った花畑、なまこ壁通りや歴史的建造物など、自然豊かでどこか懐かしさを感じさせてくれる町です。

町の美しい景観やロマン溢れる町の雰囲気を裏付けるように、松崎町は「日本で最も美しい村」連合（the most beautiful villages in japan）に加盟しています。この連合に加盟することによって、地域資源を発見・保護・発信している側面もあります。

地域の魅力は景観だけではなくありません。桜餅などに使われる桜葉は生産量日本一を誇り、町のお店には桜葉を使った料理やお菓子が並んでいます。また、海に面した町であることから海の幸を楽しむこともできます。

これまでの活動

私たちは『好きを咲かせる』をフィールドワークのテーマとして設定し、活動を行ってきました。

松崎町全体が『土』、松崎町に関わっている人々が『種』にあたります。そして私たちがフィールドワーク活動のなかで知った松崎の魅力や課題を伝える・解決することで、私たちの存在そのものが『水』となり、『種』である松崎町に縁のある人々の、松崎町に対する『好き』の気持ちを『咲かせる』ことを目的に活動していこうという気持ちを込めたテーマです。

このテーマをもとに、これまで以下のような活動を行ってきました。



商店街調査

商店街の方々との交流や今後の活動の参考にするため商店街にある店舗等への聞き取り調査を行いました。

中高生との交流

松崎中学校、松崎高校の生徒の方々ワークショップを行いました。
また、松崎高校の文化祭に参加し展示や企画を行いました。



情報発信

松崎町の魅力を地域内外に発信するため、観光パンフレット・松崎町PRコンテストの開催を計画しました。

イベントへの参加

棚田のライトアップイベントや棚田フェス、秋祭り等に参加し、松崎町内外の方々との交流を深め松崎の伝統を体験しました。



なまこ壁通りの様子



桜葉を使ったクッキー



テーマイメージ

2020年度の活動について

2020年度、私たちが取り組んだ活動は以下の通りです。

6月 Zoomミーティング

新型コロナウイルス感染拡大により松崎町に行けなかったため、町の状況や今後の活動方針を行政の方や観光協会の方とZoomで共有しました。商店街各店舗の感染対策の情報をまとめる案や密にならない観光地をPRする案が提示され、新たな生活様式に合わせた活動方針が議論されました。

11月 フィールドワーク

日帰りでフィールドワークを行いました。町ではどのような新型コロナウイルス感染対策がとられているかを実際に見て・聞いて確かめることができました。また、行政の方に直接お話をうかがうことができ、今後はサステナブル・ツーリズム（※1）の構築を目指すという方針に至りました。

3月 Zoomミーティング

11月のフィールドワーク後、私たち静大側のみで数回ミーティングを行い、サステナブル・ツーリズムの構築を目指した企画案を考えていきました。その中で松崎町の3月現在の様子や商店街の方々の状況、企画案への反応などを知るために、商店街の方々へZoomを用いた聞き取り調査を行いました。

（※1） サステナブル・ツーリズム・・・地域の自然環境を維持しつつ、観光業の活性化と住民の生活満足度向上を両立させること。

これから取り組むべきこと

これまでの活動から、私たちは松崎町を知るとともに、町の課題を発見することができました。

それは例えば、観光業を町の主な産業にしているためコロナ禍ではなかなか集客が難しいこと、若者が進学や就職を機に町から去ってしまうこと、町の資源や魅力を十分に発信できていないこと等が挙げられます。

このような私たちや町の方々を感じている町の課題を解決に導くため、私たちは今後、以下のような活動に取り組んでいきたいと考えています。

○松崎町の方々との交流を深める

今まで参加していた松崎高校の文化祭や町内の各イベントに2020年度は参加できなかったことから、薄れつつある静大側と松崎町との交流を再び深めていきたいと考えています。新型コロナウイルス感染拡大の状況を鑑みながらの活動にはなりますが、2020年度に行ったZoomミーティングでの経験を活かしてオンラインでの交流のしかたも探っていきたいと思います。

○松崎町のサステナブル・ツーリズムの構築

今まで考案してきたサステナブル・ツーリズムを意識した企画案をブラッシュアップし企画・実行に移します。企画案には、商店街全体をスゴロクに見立て商店街の各店舗の集客率を高める案や、空き家の利活用、商店街の店舗ごとにPRポスターを作成する案などがあり、松崎町の方々のニーズ及び実現可能性を十分に考慮しながら取り組んでいきます。

私たちを受け入れてくださっている松崎町の方々のご厚意に感謝しながら、今後も私たちにできることを考え、松崎町を少しでも活性化できるよう活動に臨んでいきたいと思っています。



石部の棚田



松崎の海



松崎町 観光と防災

防災と観光の両立

メンバー

(地域経営) 1年 橋ヶ谷有沙
(地域環境・防災) 3年 平江夏樹、2年 更家優和、那須野智大、
1年 田丸結珠
(アート&マネジメント) 4年 中村実李、1年 川嶋梨々花
指導教員：○准教授 原田賢治
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

松崎町企画観光課
松崎町総務課
静岡県立松崎高等学校
松崎町西区、中区、北区のみなさま

地域概要

伊豆半島南西部の海沿いに位置する松崎町は、「日本で最も美しい村連合」に加盟しており、なまこ壁、棚田や海岸などの美しい景観を持つことから、観光地として有名な港町である。

海底火山により形成された不思議な地形や海などの自然風景や、国指定重要文化財の岩科学校などにみられるなまこ壁など、見所の多い地域であり、駿河湾に面した豊かな漁場からの海の幸や国内シェア7割を誇る桜葉の塩漬けなど、食の魅力にもあふれている。

しかし、海沿いに位置するため、南海トラフ巨大地震発生時には約7分で最大15mという大きな津波被害が想定されている。町内は細い道が多く、高齢化も著しいことからソフト・ハード面ともに防災施策への取り組みが急務である。

(画像は松崎町観光協会HPより)



伊豆の長八美術館



国指定重要文化財 岩科学校



松崎海水浴場



松崎町マスコットキャラクター
「まっちー」



松崎町特産品の川のりを使った
「川のりコロッケ」



国内シェアの7割を誇る
「桜葉の塩漬け」

これまでの活動

防災訓練の実施

松崎町西区の津波避難タワーへ避難する地区において、地震発生時に通れなくなる恐れのある狭い道を封鎖して避難訓練を行い、津波避難タワーの設備紹介を行った。

災害時を意識した行動の促進と、防災施設の把握により災害時の住民の主体的な対応力を向上させる目的で行ったが、実際には防災施設や用具の使い方を把握していない住民が多かったため、緊急時に誰でも使えるような普及活動を行う必要性があると分かった。



中瀬邸での視察

周辺観光地の調査

南伊豆や西伊豆の主要観光地の調査を行い、伊豆半島における松崎町の観光地としての立ち位置を考察した。

その結果、松崎町の魅力はのどかな雰囲気であり、地域全体が1つの観光施設であるような一体感であることが分かった。一方、地域全体のイメージ戦略の中で、今後建設される予定のある防潮堤による景観への配慮と調和について考えていく必要がある。

AED講習の計画

松崎町はこれまで多くの防災訓練を行ってきており、これまで行ってこなかった内容の防災訓練を求めている。そのため、まだ開催されていなかったAED講習を防災訓練内で行おうと考え、開催のための下準備を行った。

AED講習当日は、新型コロナウイルスの影響で中止となってしまったが、今後も新規性のある防災訓練を実施することで、松崎町の防災訓練をマンネリ化させず、防災意識を向上させる必要がある。

2020年度の活動について

観光看板案の製作

松崎町防災マップを参考に、避難所や津波浸水域の情報を追加した新たなデザインの観光看板案を作成した。観光名所と避難場所を同時に探すことができ、観光客への防災情報の付与も期待される。

今後の活動として、今回作成した内容をもとに、老朽化した現地看板のリニューアルを行う予定。



作成した観光看板デザイン



危険箇所の視察の様子

クチコミ防災マップの作成・配布

松崎町西区・中区・北区の住民の方々から避難時における危険箇所や、注意の必要な場所をクチコミとして集め、1枚のマップにまとめた。

集まったクチコミをもとに、実際に危険箇所として挙げられた場所を視察し、その危険を回避するための行動についても「避難するときに気を付けたこと」として図解で示した。

これらを3月の防災訓練時に配布したことで、危険箇所の共有や避難経路の確認・見直しの手助けになるものとなった。



完成したクチコミマップと「避難するときに気を付けたこと」の図解



避難訓練での防災講座

2021年3月7日に行われた防災訓練において、松崎町西区・中区・北区の避難訓練が完了した後、住民の方をホールに集め、防災講座を行った。

クチコミ防災マップの説明と、コロナ禍の避難で気をつけることについて、住民の方々に向けて説明した。特にコロナ禍の避難について、住民の方々の関心が高いように見受けられ、現在必要とされていた情報を提供することができた。



環境改善センターで行った防災講座

これから取り組むべきこと

①「観光」面の活動内容の充実

今までの活動では、「防災」面では一定程度の活動を行うことができていますが、観光面ではどのような活動を形にできるか、未だ不明確である。今後、フィールドワークとしてどのような活動ができるかを考え、実行する。

②「観光マップ」の刷新

①に関連して、松崎町街中の観光看板が古く、劣化が激しいものがある。そこで2020年度の活動で作成した観光看板をもとにより観光地を見やすく、さらに防災情報も加えた観光マップを作成する。

③避難訓練の多様化

松崎町では、合同避難訓練が毎年3月に行われているが、毎回ほぼ同一の内容で、参加者のマンネリ化が問題となっている。そこで、抜き打ちや夜間の避難訓練を実施することで、よりバリエーションを持たせた避難訓練を行い、有事の際の行動に活かせるようにする。

④町民の防災意識向上への取り組み

2020年度は「クチコミ防災マップ」を町民の方々と一緒に作り上げるなど、町民の防災意識向上に関する活動は一定程度行うことができたが、今後は違った手法でより町の方々の防災意識向上に貢献することができる活動を行う。

メンバー
 (地域経営) 3年 土橋もも、星野海輝也、2年 大石竜弘、増田実奈、
 1年 中垣乃彩
 (地域共生) 1年 竹下智也
 (アート&マネジメント) 3年 河村清加、1年 石田百香
 (スポーツプロモーション) 2年 内藤由里子
 指導教員：○教授 阿部耕也、准教授 牛場智
 ※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
 NPO法人ローカルデザインネットワーク

地域概要

東伊豆町・稲取は伊豆半島南東部に位置する港町であり、金目鯛などの食や、景色、温泉などを活用した観光を産業の主軸としている地域である。

町には伊豆急行線の伊豆稲取駅があり、東京などからのアクセスもよく、観光客が多く訪れる。

また、稲取は雛のつるし飾り発祥の地としても有名であり、毎年1月20日から3月31日にかけて「雛のつるし飾りまつり」を開催している。

私たちの受け入れ先であるNPO法人ローカルデザインネットワーク(LDN)は、東伊豆町を拠点に、関係人口を増やすためのイベントの企画運営、空き家の利活用業、マネジメント業等、「都市とローカルをつなぐ」をモットーに活動を行っている。

これまでの活動

2019年度までは、人が行きかう稲取を実現させるために「UCHIRA(稲取のことが好きな人の総称)を増やす」ことを目標とし、様々なイベントを開催して活動してきた。

【2018年度 主な実施活動】

○雛のつるし飾りにちなんだイベント
 「雛フェス」での2つの企画・出店

- ・ハーバリウム製作体験ブースの出店
- ・ライブペイント



写真3 ハーバリウム作りの様子



写真4 ライブペイント完成品

【2019年度 主な実施活動】

○ロゲイニング風RPG「INATORI QUEST」

狙い：稲取は伊豆稲取駅から旅館街まで距離があり、観光客がバスで移動してしまうため、観光客に稲取の街を歩き、魅力をもっと知ってもらおうと考えた。

内容：制限時間内に指定した稲取のスポットを巡り、そこでミッションに挑戦してもらい、獲得得点を競う。

上位3チームには豪華賞品を贈呈した。

←ゲーム性のあるまちあるきは参加者からも好評で、地元の人の良さや景色など稲取の魅力を感じてもらえるきっかけにできた。

○第2回雛フェスに向けての準備

- ・第2回ライブペイント
 - ・フォトフレーム作りワークショップ
- ←新型コロナウイルス感染症の影響で開催中止
 すぐに実施できるところまで準備が終わっているため、来年度以降で活用したい。



写真5 INATORI QUESTの様子

2020年度の活動について

昨年度は関係人口や観光客等、外からの活性化だけでなく、地域住民、地域で活動しているプレイヤーの力を活かしてこそ、地域活性化につながるのではないかと仮説をもとに、地域の人(UCHIWA)を巻き込んで活動してきた。

○東伊豆学生サミット(オンライン)

内容：各テーマごとの分科会形式のグループワークを実施し、意見交換を実施。

東伊豆フィールドワークメンバーとして、イベント中のファシリテーターや、開催に向けての広報、連絡などの運営側を担った。

←東伊豆地域で活動する学生がそれぞれの活動を報告するなかで、他大学との連携の可能性も考えることができた。



写真6 東伊豆学生サミットの参加者の集合写真

○ダイロク通信 静大フィールドワークレポート執筆

東伊豆町の回覧板で全戸配布されているダイロク通信に、静岡大学東伊豆フィールドワークとして、1年生の自己紹介記事、活動内容を紹介する記事等を執筆した。

○東伊豆通信 インタビューのお手伝い

「東伊豆町」の人にフォーカスした東伊豆町の公式ウェブメディアに掲載されているインタビュー記事の作成(インタビュー、原稿執筆)を行った。



写真7 東伊豆通信インタビューの様子

○東伊豆未来会議2021 参加

東伊豆町内で新しくプロジェクトを始めようとしている3団体からの発表を受け、フィールドワークメンバーがそれぞれ参加者として興味あるプロジェクトのオーナーとのグループディスカッションに加わり、来年度の東伊豆フィールドワークとしての活動の軸を決めようとした。



写真8 プロジェクトお手伝いの様子

これから取り組むべきこと

2019年度のテーマ UCHIRA(稲取のことが好きな人の総称)を増やす

↓

2020年度のテーマ UCHIWA(UCHIRAの中でも主に地元で生活や活動している人)を増やす

↓

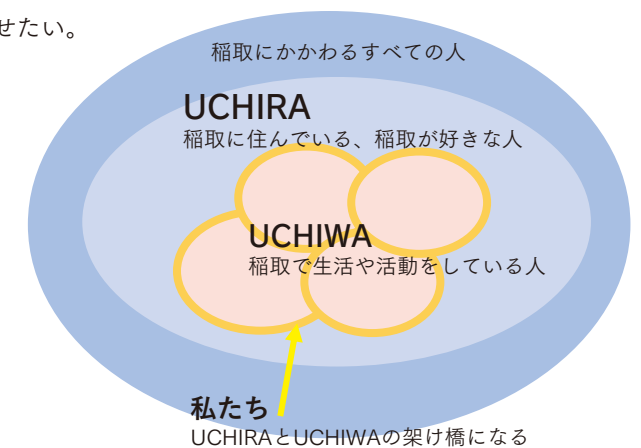
2021年度のテーマ「UCHIRAとUCHIWAをつなげる～外部(大学生等)と地元の人をつなげる～」

今年度は、これまでの活動で知り合うことができた各領域で精力的に活動しているUCHIRAやUCHIWAの人同士を繋ぐ架け橋的な存在になることを目指す。

そして、つながりを活用したイベントを企画・実行させたい。



写真9 プロジェクトお手伝い終了後の記念撮影



伊豆半島ジオパーク 保全と防災

伊豆半島ジオパークにおける環境保全と防災対策

メンバー
(地域共生) 2年 西原悠人
(地域環境・防災) 3年 福山めぐみ、1年 片川拓巳、木村瑠羽
指導教員：○教授 小山真人
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
伊豆半島ジオパーク推進協議会
伊豆半島ジオガイド協会
西伊豆町災害ボランティアコーディネーター連絡会
浜松市学校生活協同組合
静岡県立浜松工業高等学校

地域概要

「見慣れた地形・風景には、すべて意味がある」—伊豆半島ジオパークは、伊豆半島の特徴的な自然とそこに育まれた地域社会のつながりを可視化する場である。ジオパークとは、地域の自然遺産を通して大地（ジオ）、生態系（エコ）、歴史・文化（ヒト）の3つのつながりをより深く理解し、それらを観光や教育などに活かすことによって地域社会の持続的発展を促すプログラムである。また、過去たびたび自然災害の被災地となってきた地域においては、防災教育への貢献もジオパークの重要な課題のひとつである。

本フィールドでは、2017年から伊豆半島ジオパークにおいて環境モニタリングや津波防災教育に関する活動に取り組み、さらに2020年からは浜松市と湖西市を中心とした浜松・浜名湖ジオパーク構想に基づいて地域の魅力を再発見・普及する活動を進めてきた。

伊豆半島は、かつてフィリピン海プレート上に生じた海底火山群がプレート運動によって本州に衝突・陸化して現在の形となり、現在もなお活発な地殻変動や地震・火山活動が続いている地域である。そうした特異な成り立ちを反映した多数の地質学的資産と、それらが育んだ独自の生態系や歴史・文化遺産、ならびにそれらを保全し後世に伝える人々の活動が認められた結果、2018年にユネスコ世界ジオパークに認定された（図1、2）。

一方、浜松・浜名湖地域は北に赤石山系、東に天竜川、南に遠州灘、西に浜名湖と異なる自然環境に囲まれ、北部には日本列島の屋台骨とも言える様々な地質学的資産も備えている上、度重なる洪水・津波災害の痕跡も数多く存在している（図3）。

これまでの活動

・地域と連携した津波防災まち歩きマップの電子化と共有

伊豆半島西岸の西伊豆地域は津波の常襲地帯であるにもかかわらず、危険箇所等の防災情報は、地域住民に十分共有されていない状況にあった。そこで私たちは、2018年に国立研究開発法人防災科学技術研究所が開発・公開しているWebプラットフォーム「地域防災Web」の提供するWebシステム「eコミマップ」上に、西伊豆町災害ボランティアコーディネーター連絡会により集められた危険箇所等の情報を入力し、いつでも容易に参照・更新できる西伊豆地域の防災情報共有サイトを作成した。

さらに2019年には防災情報共有Webサイトの防災情報を集約するための電子地図を用い（図4）、静岡県立松崎高等学校の生徒ならびに西伊豆町の地域住民を対象に、西伊豆町の仁科地区および田子地区内で津波防災まち歩きを実施した上で、意見交換会・質問紙調査も行い（図5）、操作方法についての利点や課題を明らかにした。

↓図1
伊豆半島ジオパーク中央拠点施設「ジオリア」の様子



↑図3
浜松市西区舘山寺にあるチャート海岸



図4 eコミマップを用いた防災情報共有のための電子地図



図5 2019年9月に行った津波防災まち歩きの様子

2020年度の活動について

・浜松・浜名湖ジオパーク構想地域でのオンラインジオツアーの開発

2018年の浜松市観光ビジョンによると市民が愛着や誇りを持てる都市にすることが目指されている。そのためには、地域の資源を活用し、地域の魅力を再発見・普及していく必要があると考えた。また、観光ビジョンの中では自然や歴史、文化資源の活用がうたわれており、ビジョン実現のためにはジオツアーが有効な手段だと考えた。

2020年は新型コロナウイルス感染症対策の必要性から、自宅にいながら参加できるようにツアーのシナリオや機材を調整し、Zoomビデオコミュニケーションズのオンライン会議アプリ「Zoom」を用いて2020年9月と11月の2回オンラインジオツアーを実施した。

浜松・湖西市内の全小学校の小学校高学年とその保護者を対象に参加者を募集し、第1回目（2020年9月）は40家族、第2回目（2020年11月）は23家族が参加した。

2020年9月は第1回オンラインジオツアー「奇跡の湖・浜名湖～五感で体感する、ふるさとのジオドラマ」をテーマとし、浜松市西区・湖西市を中心に浜松地域を襲った地震や津波の痕跡が残る場所を案内し、浜名湖の成り立ちを学ぶ謎解きツアーを実施した（図6）。

2020年11月は第2回オンラインジオツアー「奇跡の川・天竜川～あばれ天竜が生み出した?!浜松の大地と産業」をテーマとし、天竜川の氾濫によって浜松の大地ができたことを実験やクイズで解説し、自然災害と人々の暮らしとの関わりで地元の産業である繊維産業が発展したことを学ぶツアーを実施した（図7）。

両ツアー実施後のアンケート調査の結果、第1回より第2回のツアー満足度が向上していることが分かった（図8）。

その要因としてはインターネットへの配信技術やシナリオ構成の改善、クイズや実験・オープニング映像の導入をしたことが挙げられる。また、第2回ツアー後のアンケートでは「このオンラインジオツアーの成果をどう生かしたいと考えていますか?」という設問に対して、「この地域のことを勉強したい」と答える参加者が多くいた（図9）。

以上の結果からオンラインジオツアーを通して地域に対する学習意欲が高まったことがわかった。

これから取り組むべきこと

上記のように、オンラインジオツアー開発では、通信環境やシナリオ構成の改善・工夫によって参加者の満足度や理解度が高まることが分かった。さらなるツアーの品質向上のため、参加者がより一層主体的にツアーに参加するための仕掛けを検討していく必要があると考える。今後も地域の教育機関や団体等に協力を得ながら実践を重ねて、オンライン・対面のどちらの方式においても参加者が地域についてさらに深く学び、魅力を再発見することのできる学習ツアーを開発していきたいと考えている。

なお、西伊豆町での活動については新型コロナウイルス感染症の影響により2020年は十分に活動できなかったが、今後も防災まち歩きやeコミマップを活用した取り組みを継続し、地域住民の防災意識の向上を目指したい。



図6 第1回ツアー浜名湖畔からの生中継



図7 第2回ツアーのオープニング映像

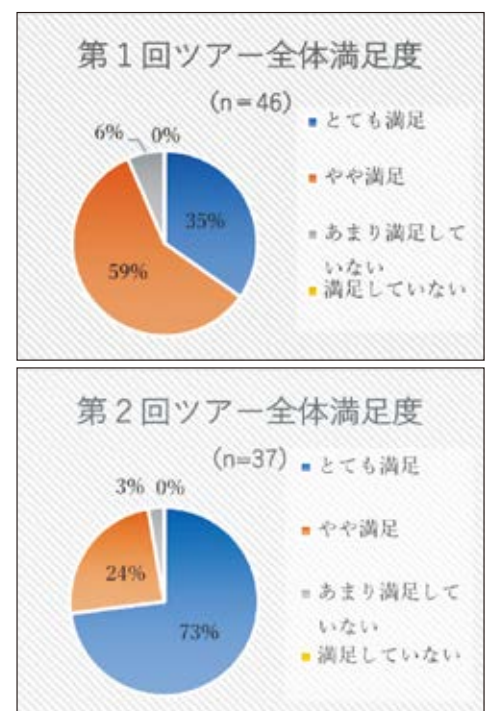


図8 第1回ツアー（上）と第2回ツアー（下）の満足度比較

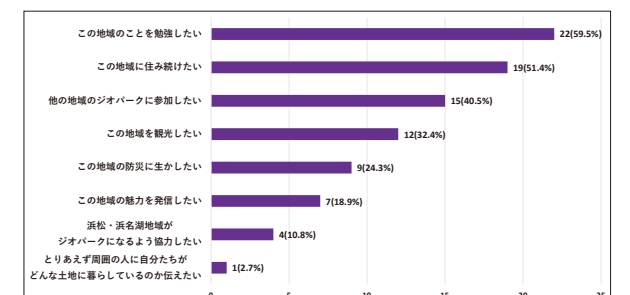


図9 「このオンラインジオツアーの成果をどう生かしたいと考えていますか?（複数回答可）」の回答

伊豆半島ジオパーク 教育

伊豆半島ジオパークの持続可能な開発と教育（SDGs／ESD）の推進

メンバー
(地域経営) 2年 北嶋泰成、1年 中橋幸作
(地域環境・防災) 1年 青木奏磨
(アート&マネジメント) 1年 一瀬日南子、辻真衣子
(スポーツプロモーション) 3年 神谷拓実、2年 永井結登
指導教員：○准教授 山本隆太
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
伊豆半島ジオパーク推進協議会
伊豆半島ジオガイド協会
静岡県賀茂地域局
株式会社伊豆バス

地域概要

静岡県東部に位置する伊豆半島には浄蓮の滝、石廊崎など風光明媚な観光名所に加え、修善寺や伊東などのような歴史ある温泉地が数多く存在する一方、人口流出は静岡県内でトップレベルという問題を抱えている。そんな伊豆半島では15の市町が協議会を構成し、伊豆半島ジオパークを運営している。伊豆半島ジオパークは2018年の4月、日本国内で9番目となるユネスコ世界ジオパークに認定された。

ジオパークでは、「保護」「教育」「持続可能な開発」の概念が一体となった活動が求められている。

私たち伊豆半島ジオパークフィールドワーク教育班では主に「持続可能な開発」の視点、つまりSDGsの視点を重視しながら、伊豆半島ジオパークにおける調査や研究、イベントなどを通じた教育活動の支援に関わっている。



これまでの活動

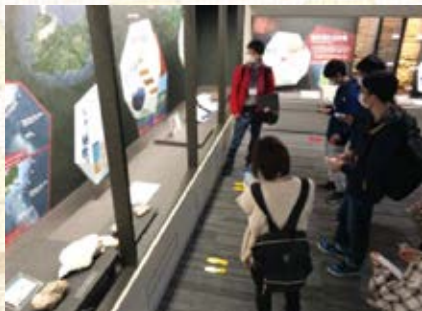
1年目
・ジオパークについての学習
・ジオガイドとのワークショップ
・パンフレット作り

2年目
・SDGs内まんの開発
・ジオパン開発、販売支援
・郷土料理についての学習

3年目
・大学生を対象としたツアーの開設
・VR動画を利用した教材の開発
・食育教材の作成



2020年度の活動について



上級生から下級生への指導

4年目となる2020年度では、前期はオンラインで伊豆半島に住む人々に対するヒアリングを行い、コロナ禍における伊豆半島の現状の調査や課題を探した。

後期は北伊豆、中伊豆を中心に、2年生がガイド役を務めながら1年生に対して伊豆半島の知識を伝えた。また、前期に関わりを持つことの多かった伊豆半島南部の賀茂地域に出向き、オンラインツアーや現地での研修を行った。またあらたに、e-bikeやクアオルトなどスポーツ・健康分野での観光開発、教材開発を検討している。

大学生のためのジオツアー

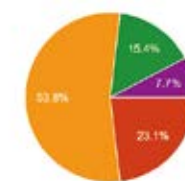


現地のガイドと共にオンラインツアーの実施

5.今回一番印象に残った内容をご回答ください。
13件の回答

- アイスブレイク
- クイズ競技
- 伊豆半島ジオパーク(観音崎、サンドスパー)見学
- 高伊豆ダイビング
- 高校生交流

イベント全行程の中でも高い評価を獲得



ジオ×スポーツ

e-bike

『概要』

伊豆半島の中でサイクリングに適したルートを考え、サイクリングマップを作成。サイクリング途中で立ち寄った場所を360度カメラで撮影し、マップにQRコードを貼り付けることで景色を楽しめるオリジナルなマップを作成した。

『活動意義』

これまで伊豆半島ジオパークを知らなかった人がスポーツを通して、ジオパークに興味を持つきっかけを作る。

『活動内容と成果』

事前に下見を行いサイクリングしやすいようなルートを作成・確認し、ルート内の狩野川放水路や雄飛滝の景色を360度カメラで撮影した。また体力に自信が無い方でも気軽に楽しめるようにe-bike（電動アシスト化ロードバイク）のレンタル予約先をマップに加えるなど、すぐにサイクリングの準備が整うような工夫を凝らした。

クアオルト

『概要』

クアオルトとはドイツ語でクア（治療・療法）とオルト（場所）という言葉が合わさったもので「療養地」という意味である。ウォーキングによって健康増進に努める活動がドイツで先進的に行われている。それをアレンジしたものが日本各地でも実施されている。伊豆半島ジオパークでもその自然の豊かさを活かした活動を実施、普及する。

『活動意義』

年齢や体力に自信が無いなどの理由で運動を避けている人が多い。そんな人にクアオルトでのウォーキングを通じて「運動＝頑張るもの」ではなく「運動＝楽しいもの」という考えを持ってもらう。クアオルトを伊豆半島ジオパークの観光の1つとして位置付けることを目標としている。

『活動内容と成果』

今年度はクアオルト実施に向けクアオルトについての知識を身につけ、1年間の予定を作成した。今後はクアオルトを実際に体験し、クアオルト候補地から実施場所を決定し、伊豆半島ジオパークでクアオルトを開催する。

これから取り組むべきこと

今年度はあらたに賀茂地域に活動のエリアを広げた。今後は賀茂地域ならではの問題を見つけ出し解決していく。具体的には賀茂地域でのイベントでジオパークガイドを務めたり、賀茂地域の旅行業者と共にジオパークのツアー開発を進めていくことを検討している。

とくに、アニメで取り上げられるようになった伊豆半島ジオパークに対し、作品のファンなどの外部の人間をどのように地域に取り込んでいくかという課題があり、その方法を検討している。また、クアオルトをジオパークで活用する方法も検討する。

その他、1年生がそれぞれの特性を活かしながら独自のプロジェクトを立ち上げ、進めていく。

現地のガイドから学習する1年生



県営団地

多世代の居場所づくりと地域福祉資源のネットワークング

メンバー

(地域共生) 3年 大塚紗菜、竹村定期、丹羽唯人、2年 中村文
(地域環境・防災) 4年 遠藤爽、1年 山口望、渡邊大翔
(スポーツプロモーション) 2年 仲原風歩
指導教員：○准教授 山本崇記、准教授 祝原豊、准教授 須藤智
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

社会福祉法人静岡市社会福祉協議会

地域概要

県営団地とは、県が運営を行っている公営団地のことである。入居には収入や年齢などによる制限が設けられている。

これまで、活動してきた清水区の吉川県営団地は、静岡大学から車で30分の場所にある。入居人数は260人で、高齢化率が45%と高いのが特徴である（2019年度）。

今日、高齢者の孤独死や買い物難民などが各地で問題となっているが、静岡県内の県営団地も例外ではない。吉川県営団地ではこれらの問題に加えて、若者が少ないという課題も発生している。

これまでの活動

①地域アセスメント（2018年9月）

「地域アセスメント」を通じて、地域内外の方々と話し合いながら、地域の特性や社会資源、地域ニーズなどを分析・共有し、地域の現状を把握することができた。

②でん伝体操（定期的）

でん伝体操とは、静岡市による高齢者向けの介護予防体操であり、団地の方々と共に体操を行った。

③お花の会（定期的）

お花の会は、団地の花壇や空き地に花を植え、団地を明るくすることを目的としており、その活動に参加した。

④折り紙の会（定期的）

普段は5～6人程度が参加しており、でん伝体操の参加者の中から参加を募って行っており、参加した。

⑤非常食試食会（2019年2月）

地震などの災害がおこった際に、一番問題になりやすい食糧問題に対して、非常食の存在とその美味しさとともに、アレルギー問題やローリングストックについて知ってもらうために試食会を実施し、大変好評を得た。

⑥子ども向けイベント（2019年10月・12月）

住民からの要望を受けて高齢者だけではなく子ども向けのイベントを2回行った。1回目はハロウィンパーティー、2回目はクリスマスパーティーを行い、吉川団地に住む子どもたちや保護者との交流を深めることができた。

⑦しずおか自治取組発表会（2020年1月）

しずおか自治取組発表会は、静岡市内の自治会町内会の取り組みを発表し、学び合う場である。参加することにより自分たちのこれからの取り組みのヒントを得ることが出来た。

⑧きっかわびより（不定期）

「きっかわびより」は、住民の方々に私たちの活動を知っていただくための学生主体の広報紙である。新しいメンバーの紹介や取り組んだイベントの様子を伝える媒体として活用した。



吉川団地



でん伝体操の様子

2020年度の活動について

2020年度の活動は、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、フィールドである県営団地へ足を運ぶことが困難となった。そのため、前期は、フィールドワークのあり方について専門書を輪読し、これまでの活動を振り返る機会を設けた。また、後期は先進地域の取り組みを学ぶため、フィールドパートナーである静岡市社会福祉協議会との懇談を行い、同じ清水区内でユニークな居場所づくりをしている小島地区の龍津寺に受け入れをお願いすることができた。

輪読について（前期）

『フィールドワークの技法』『地域の〈実践〉を変える社会福祉調査入門』の2冊を輪読し、これまで行ってきたフィールドワーク活動についての課題を点検し、現地への関わり方、成果の公表の仕方について検討した。

龍津寺について（後期）

静岡市清水区小島地区にある臨済宗のお寺である。住職の勝野秀敏さんは「分福食堂」「子ども寺子屋」など、地域の子どものお年寄りに向けてお寺を開放し、居場所づくりを実践している。静岡県社会福祉協議会主催の「ふじのくに地域共生大賞」も受賞されており、私たちは、インタビュー調査と子ども寺子屋への参加を行った。

①インタビュー調査（2020年12月18日）

Zoomを活用して、オンライン・対面の併用でのインタビューを試みた。質問の内容は主に次の5点であった。①子どもたちの居場所づくり「寺子屋」の目的、②コロナ禍における地域住民のニーズ、③学生などの「よそ者」が入ることの問題点、④中山間に位置する小島地区での防災の現状、⑤高齢者の様子、である。勝野住職は、「課題解決」や「ニーズ」にこだわり過ぎず、自然に誰もが集える居場所づくりを作っていくことの重要性を強調された。

②子ども寺子屋への参加（2021年1月30日、2月6日、2月27日）

寺子屋への参加は感染症対策の関係から3回に分けて、小グループで行った。寺子屋では、まず勉強に集中するため『論語』を音読し心を鎮めるところから始まる。そこから学生が先生役（見守り）となり勉強を教えつつも、子どもたちと談笑したり、勉強後には寺の周りを走り回ったりして、楽しんだ。お寺がコミュニティの拠点として愛されており、子どもや保護者も含めて、重要な居場所になっている姿を垣間見ることができた。

これから取り組むべきこと

- ・龍津寺の取り組みに継続して関わらせて頂く。また、社会福祉協議会と連携し、清水区内の先進的な居場所づくりに学ぶ。
- ・小島地区における多世代の生活状況やニーズについて把握する。
- ・小島地区の防災対策の現状を調査し、地元小学校とも連携し、防災教育の実践を試みる。
- ・県営団地との関わりを引き続き慎重に追求し、先進地で学んだことの応用可能性を検討していく。



龍津寺外観



インタビュー中の様子



寺子屋の様子

学内地域連携拠点

静大発 地域と大学の連携を広めよう！

メンバー

(地域経営) 3年 伊澤功多、鈴木沙雪、古田萌黄、2年 田崎碧、
1年 太田そよ香、納舌成
(地域共生) 1年 油井柊斗
(アート&マネジメント) 3年 坂口律子、2年 内柴麻衣
指導教員：○特任助教 川崎和也
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

静岡大学学務部地域連携推進課（地域創造学環係）

地域概要

学内地域連携拠点フィールドは2018年度より活動を開始したフィールドである。現在、私たちは静岡大学地域創造学環（以下、学環と明記する）を主な連携先として活動を展開している。

学環は2016年4月に誕生した全学学士課程横断型教育プログラムである。幅広い教養と高い専門知識を身につけながら、地域／フィールドに飛び出して、魅力的な地域社会の創造に取り組むことのできる人材の育成を目指している。そこで、学環のカリキュラムの柱のひとつとなるのが「フィールドワーク」の授業である。静岡県内14か所において、フィールドワークを展開している。



活動について話し合いを行う様子

これまでの活動

学内地域連携拠点フィールドは、2019年度までは静岡大学学務部教育連携室（現在、学務部連携推進係）と連携し、「静大発“ふじのくに”創生プラン」（文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」）の促進を目的として活動を行ってきた。とりわけ、私たち自身が「地域と大学の接点となる」ことを意識して以下のような活動に取り組んだ。

① 地域創造学環ホームページの改定

学環の魅力を受験生により広く伝えるために、学環のホームページの内容を改定した。センター試験が終了し、受験生の多くがホームページを閲覧するであろう1月中旬に公開することを目標に、夏季オープンキャンパスに訪れた高校生たちを対象にアンケートやインタビューを実施したり、学環の教員らとの協議を重ねて、学環のホームページの改定に取り組んだ。



改定されたホームページ



オープンキャンパスで高校生と話す様子

② オープンキャンパスでの展示企画の実施

学環の広報の一環としてオープンキャンパス（OC）で何か企画を行いたいとの意見から、夏季OCへの参加およびキャンパスフェスタ（秋季OC）での企画を実施した。企画の内容としては、①学環のフィールドワークのポスター展示、②学環1年生への質問コーナー、③各フィールドの特産品の展示および試食会の実施などの意見があがり、これらを実現するための準備に取り掛かった。しかし③の企画が諸事情により実現が困難となったことから、急遽、④フィールドワークで活動する学生たちの写真とメッセージを記載したポスターを制作し展示することにした。2日間にかけて開催されたキャンパスフェスタには約100名の来場者があった。当日は学内地域連携拠点フィールドの学生と他の学環生4名がその対応にあたった。

2020年度の活動について

2019年度をもって「静大発“ふじのくに”創生プラン」が終了した。2020年度の活動に取り組むにあたって、連携先を静岡大学学務部教育連携室から地域創造学環係に変更した。そして引き続き、①学環のフィールドワーク活動の情報発信に取り組むとともに、②学環のフィールドおよび学生たちをつなぐことを、私たちの新たな活動の方針に定めた。

① 全国の大学のホームページの調査

学環のフィールドワークの情報発信に取り組むにあたり、私たちは、まず全国各地にある地域系の学部・学科を持つ大学のホームページ調査を行った。ホームページの見栄え、フィールドワークの紹介記事の有無、動画の有無、更新率など11の項目について、20の大学を対象にして検証した。さらに20の大学のホームページを学環のホームページと比較検討し、学環のホームページの良い点、課題、改善点を明らかにした。その後、これらの調査結果を学環のフィールドワーク委員会に報告し、今後、学環のホームページの改善に向けた取り組みがなされることとなった。

② フィールドワークの取材、活動紹介記事の作成

学環のフィールドワーク活動の情報発信に取り組むにあたって、私たちは各フィールドの活動を紹介する記事を作成することにした。その第一弾として、2020年11月23日、掛川市にある「田園空間博物館 南遠州とうもんの里総合案内所」を訪れて、とうもんの里フィールドの学生たちの活動の様子を取材した。またフィールドワークの受け入れ先の方々だけでなく、学生たちにもフィールドワークの魅力やフィールドワークを通して成長したことなどについてのインタビューを行った。その後、これらの取材した内容を整理し、取材記事を完成させて、冊子として刊行するとともに、学環のホームページでも公開した。



フィールドワークの取材の様子

実際のとうもんの里取材記事



③ フィールド交流会の企画

学環の各フィールドの代表者を集めて行う交流会を企画した。各フィールドが意見を交換し、直面する課題を共有し、その解決に向けて協力して取り組むことで、学環のフィールドワークの活動を活性化させることが目的である。交流会を企画した理由は、私たちは、以前からフィールドワーク報告会を除くと、学環の各フィールドの学生たちが交流したり、意見交換を行う機会がほとんどないと感じていたからである。

今年度はその実現に向けた準備期間と位置づけて取り組んだ。どのような交流会を、いつ、どこで、どのように開催するのかなどについて話し合いを重ねた。交流会では、活動内容の詳細を明確にし、交流会をスムーズに行うことで、より深い課題を発見・共有し、その課題に向けて協力して取り組むために、意見交換のテーマを設定することにした。そして、各フィールドではSNSを活用した情報発信に取り組んでいることから、「フィールドワークにおける情報発信について」というテーマで交流会を開催することを決定した。そのために、各フィールドに向けた事前アンケートづくりに取り組んだ。

これから取り組むべきこと

📌学環のフィールドワークの取材、活動紹介記事の作成

2020年度はとうもんの里フィールドの活動取材し、その紹介記事を作成したが、今後は取材の対象を他のフィールドにも広げて、取材記事を「フィールドワーク・レポート」というかたちで継続して発行する。

📌フィールド交流会の開催

フィールド交流会を開催する。現在のところ2021年度の前学期中の開催を目指して、準備を進めている。交流会で出た意見やアイデアなどを報告書としてまとめる。

2020年度に2年半の活動を終えた学生たちの 声をご紹介します！ ～地域とのかかわりや実践を通じて得た学び、自らが成長できたこと～

「地域創造学環フィールドワーク」では、学生は、1年次後期から2年半、原則同じフィールドに継続的に関わり活動をします。2020年度に2年半の活動を終えた学生たちからの声を集めました。

清水港フィールドワークでは多くの経験をさせていただきしました。清水港周辺地域にはさまざまな魅力が存在していますが、一方で少子高齢化が進んでおり、地域固有の魅力があっても活かしきれない、また活気が足りないという側面があることを3年間で感じる事が多くありました。しかし、学生かつ若者である私たちが寄り添うことで、地域の方々に喜ばれるような経験を何度もさせていただきました。地域活性化をすることが現状難しくても、その地域の人々に寄り添うだけでも、その地域の人々が笑顔になってくれると学ぶことができました。この学びは、地域活性化のみならず、様々な側面において役に立つ大きな学びであったと思います。

コロナの影響もあり、私たちの代では成せなかった心残りもあります。後輩たちには私たちのやれなかったことにもチャレンジして、清水港を地域の人々と盛り上げてほしいと思います。

清水港フィールド 玉木 絢女



私は駒形でのフィールドワークを通し、地域の課題に対して多角的にアプローチすることの重要性を学んだ。地域には子ども、学生、大人、高齢者といった様々な立場の人がいて、その分地域を盛り上げる要素はたくさんある。フィールドワークでは、商店街の方々以外にも、商店街の城西地域包括支援センターや静岡商業高校との連携といった、様々な切り口から地域の活性化を目指した。そして、複合的に地域の課題にアプローチすることが、徐々に地域のにぎわいの創出につながるということ、身をもって感じた。私はこのような経験から、地域を盛り上げる要素はそこにいる人たち、そこに関わる人たち全員がもっており、私たち学生の力も地域にとって大きな可能性を秘めているということ学んだ。そして、自身の成長として、多角的な視点を持ち、それを行動に移す力を養うことができた。

駒形・おまちフィールド 黒田 千晴



私たちのフィールドでは、庵原地区にあるスポーツ資源・食資源に着目し、それぞれのグループに分かれて活動した。私は、主に「スポーツ班」の一員として学びを深めた。地域には、豊富なスポーツ資源（庵原球場・清水ナショナルトレーニングセンターなど）があるものの、それらを活かすための検討が十分ではなかったように思えた。そこで、住民全戸に対する運動・スポーツ実施調査（アンケート）を行い、その結果を分析し報告した。さらに、その結果をもとに住民の方々と座談会を行いながら、今後の具体的な活動を検討することができた。これらを通じて、住民の方々の庵原に対する強い思いを感じる事ができた。また、3年間の活動を通して、私たち学生の積極的な発言・行動が大切であると学ぶことができた。今後は、住民の方々と学生との協働によって、現在企画中のイベント等を実施・評価し、さらなる地域活性化に貢献して欲しい。

庵原フィールド 植松 舞



私がフィールドワークで2年半の間、浅間通り商店街で学ばせていただいた中で、一番驚いたことは商店街ならではの人と人の繋がりと、浅間神社を始めとする商店街の歴史の深さである。商店街のお客さんは、店員さんと話をするためにお店に足を運ぶほどの常連の方が多く、店舗同士もお互いの店舗のことを知り尽くしていた。また、長政まつり、輪くぐりさんの運営のお手伝いを通して、商店街に残っている伝統を学ぶことができ、それを楽しみにイベントに足を運んでくれる人々と直接関わることができた。全ての活動を振り返ってみて、フィールドワークの中で見たことのどれもが、私自身の生活とはかけ離れているものであった。その生活の中に入り込んで、そこに住んでいる人々の気持ちになって「商店街のにぎわい創出」を目指して活動できたことは、フィールドワークでしか体験できない非常に貴重な体験であったと感じた。新型コロナウイルスの影響により達成できなかったことも多かったため、後輩たちの今後の活動に期待したい。

浅間通り商店街フィールド 森 智徳



フィールドワークを行う中で、文芸に親しむとは何かを考え続けてきた。

これまで小学生を対象にしたイベントや、老若男女問わず楽しんでもらえるような体験型の展示などに取り組んできた。そこで実感したのは、ことばや作品を他の人と共有することで、文芸を楽しむことができるということだ。一人で文芸に向き合うことは中々難しく、それを継続していくのは困難だろう。しかし一緒に文芸を楽しめる人と場所があれば、それを通じてコミュニケーションが生まれる。文芸作品が人と人、地域を結びつけるということを実感した。実際に定期的に合作俳句を作ってくれる小学生もいる。本来関わる事がなかった人たちが俳句作りにより繋がっている姿を見て、文化芸術による地域貢献の可能性を感じた。今後地域活性化を考えていく上で、重要なことを学べた貴重な経験だった。

浜松文芸館フィールド 齋藤 紫苑



私はこの2年半のフィールドワークでの活動で、「地域の方が何を求めているのか」「そのために私たちがすべきことは何か」といったことを学ぶことができ、地域により一層関心を持つようになりました。大学内での授業で、私たちは地域課題について学んできましたが、地域にはその地域の人達がそれぞれの思いを抱えています。現地での活動を通じ、こうした思いを感じとり、そのうえで自分ができることすべくことを実行する大切さに気付くことができ、自分自身の学びとなったと考えています。とうもんの方々の思いや価値観に、私が見る世界を広げていただきました。とうもんの会、地域の皆様、私たちを受け入れてくださりありがとうございました。

とうもんの里フィールド 朝倉 大翔

私たちの活動はおもに浜通りでの活動と焼津水産高校での活動の2つでした。両方で焼津市に関する評価などを聞くアンケート調査を行いました。年齢層によって評価が異なり、地域づくりにおいて地元住民の意見をしっかりと聞くことが必要であると感じさせられました。特に私たちは焼津水産高校の生徒などの若者からの意見を聞く機会が多く、私の予想とは異なる回答も多く得られ、参考になりました。

フィールドワークを通して、地域づくりに関わることは非常に多くの方々と関わり、協力して活動していく必要があるということを実感させられました。意見の食い違いなどがあり、苦勞をすることもありましたが、その中で活動をどのように進めていく必要があるのかを考えるきっかけになりました。

焼津市浜通りフィールド 坂井 朝陽



佐久間フィールドワークでは、人との繋がりである“環”を意識した活動に力を入れてきました。

地域の方との交流の中で課題を見つけ、解決策を考えることで地域に寄り添ったフィールドワークを行うことが出来ました。課題と目的を意識して、交流を行うことにより、情報を聞き出すヒアリング力や活動に対して考える力が身につきました。

また、地域の方と一緒に活動に励むサービslラーニングを行うことで、佐久間の生活により深く関わるきっかけとなったと思います。

さらに、活性化の一助として、佐久間の住民が気づいていない魅力を学生の目線で地域内外に発信することで、学びを還元する流れを生み出しました。コロナ禍で活動が進まない時期もありましたが、出来ることから行っていき、人との交流の環、そして学びの環を生み出すことが出来たと実感しています。

佐久間フィールド 籠谷 遥



私たちの学年は御前崎フィールドが新たに設置され、初めて配属される学年でした。活動当時は御前崎市についてもあまり知らない状態であり、最初は御前崎市の既存するイベント等に参加させていただき、“地域を知る”段階から始めました。そこから最終的に地域の実態、特性や強み等を生かした企画を自分たち自身で計画、実行していくことを目的とし、二年間活動してきました。

しかし、コロナウイルスの感染拡大により、企画の実現は困難となってしまいました。ですが、その中でも各種管理に関することや予算設定等苦勞する部分もあり、学び得ることは多くありました。また、様々な課題や変化の中で苦悩しながら活動をする方々の姿や人と人の繋がりやの強い地域性にも触れることができ、たくさんの良い経験ができたと思います。地域に関わる一員として多くのことにチャレンジさせてくださった御前崎市の皆様にはとても感謝しています。ありがとうございました。

御前崎フィールド 遠藤 千悺



人の命や生活に直結する防災分野と、松崎町の経済を支える観光分野に関わることはとても責任を感じるものだった。

その中で私は特に防災専攻する身として避難訓練や避難経路のワークシート作成に力を入れた。学生という立ち位置で出来ることを考えていく中で、当事者意識を持ちながらも客観的視点で防災啓発を進めていくことを意識した。

住民の方の災害観に触れる中で、想像以上の難しさを感じたこともあったが、役場の方や区長さん方との意見交換を重ねながら自分がしたい事では無く、住民が求めていることや町に本当に必要な働きかけを考える力が養われたと思う。

社会に出たのちも、仕事や地域活動を通して関わる人々に学んだことを還元していきたい。

松崎町 観光と防災フィールド 平江 夏樹



私がこの2年半のフィールドワーク活動を通して学んだことの1つは、持続的な地域づくりの重要性である。とりわけ地域の住民の方々に私たちの活動を理解していただき、それをどのように地域の中で活かしてもらうのか、という点である。

フィールドワーク活動を始める前までは、自分たちがそのフィールドにおいて地域の課題解決のために何かをすれば、地域活性化につながると漠然と考えており、自分たちがその地域でやりたいと思うこと、自分たちが考えた地域のためになると考えることをすることが1番重要だと思っていた。

しかし、たった2年半でこのフィールドから居なくなってしまう私たち大学生の活動には限界がある、ということに気づいた。そこで改めて、自分たちの活動がきっかけとなり、これからもずっと住み続ける地域の住民の方々が、その地域の未来に向けた想いを行動に移すことへとつながれば良いという考えになった。私たちは、大学生だからこそ、こうしたきっかけ作りやトリガーという役割を果たせるのだと思う。

この2年半、仲間とともに活動し、その経験から得た学びは、とても深く濃いものであった。今後社会に出てからも活かしていきたい。

松崎町 商店街フィールド 宮本 彩名



2年半のフィールドワークを通じて得た学びや自らが成長できたことは、2つあります。1つ目は、積極的に人と関わりに行く姿勢です。フィールドワークを通じて、地域の方と信頼関係をつくる大切さを感じました。今まで自分から積極的に話すことができない性格でしたが、地域の方と出会い、自然と自分から積極的に人と話せるようになりました。2つ目は、チームワークです。フィールドワークで、様々なイベント企画を行い、それぞれの役割を明確にして活動する大切さを学びました。話し合う際も、学年関係なく平等に話し合いができる雰囲気づくりを意識できるようになりました。この2年半は、多くの人と出会い、色々な経験をさせていただき、自分の視野がとても広がった経験でした。この経験で得た学びを、残りの大学生活や社会人になっても活かしていきたいです。

東伊豆町フィールド 土橋 もも



わたしは、伊豆半島ジオパーク教育班で2年半フィールドワークを行ってきた。ジオパークとは、地球を学び楽しむことのできる場所を言い、伊豆半島にはジオパークの見どころとなるジオサイトが多く存在する。しかし、ジオパークについての認知度が低いことが地域の課題に挙げられ、その課題を解決すべく活動をした。前半の1年半では、上級生のサポートをしていくうえで地域の方と関わる事が多くあった。地域の方々は、知識量や発想力などがすごく、とても刺激を受けた。後半の1年間では自ら課題解決策を見出し、サポートをしてもらいながらも課題解決に向け取り組むことができた。これまで、自分が企画をして実行するようなことは経験してこなかったため、この活動を通して企画力や考える力などの面で成長できたのではないかなと思う。

ジオパーク 教育フィールド 神谷 拓実



学内地域連携拠点フィールドは、他のフィールドと異なり、特定の地域に長期的に関わったり、地域の方々と密接に関わったりする機会はあまり多くなかったように感じます。その一方で、他大学の訪問や、他のフィールドへの取材をすることで、地域創造学環のフィールドワークの強みに気づきました。主な活動として、地域創造学環の活動をより多くの方々に知ってもらうための広報活動に取り組み、展示企画の実施、ホームページの改定、取材記事の作成を実施しました。このように、2年半の活動の中で、様々な取り組みに携わることができたことで、試行錯誤しつつも、貴重な経験が得られたと感じています。また、企画から改善までの一連の流れを実践の中で知れたことは自らの成長になりました。今後も、フィールドワークによって得られた知識や経験を存分に活かすことができるよう、励んでいきたいと考えています。

学内地域連携拠点フィールド 伊澤 功多

ジオツアーのシナリオを作成する中で、地域にある自然や環境が私たち人間の生活とどのように繋がり、どのような影響を及ぼしているのかを改めて考える機会となりました。また、これまで自分の中で漠然と当たり前になっていた価値観や考えを見直し、「なぜそうなのか」「どうしてそうなったのか」という根本的な問題を考えるようにもなりました。こうした経験を通じ、あらゆる物事について全体を俯瞰した上で、個々の意味や繋がりを意識して考えられるようになり、地域の本来の価値や魅力を自分の固定観念にとらわれずに認知・理解することができました。

さらに、大学は研究成果に裏打ちされた様々な情報を発信することができるため、ジオツアーの実践を通して学童や地域住民に地域の価値や魅力についての最新かつ正確な知識を伝えることが可能となり、そのことが持続可能な地域づくりに大きく貢献することも実感できました。

ジオパーク 保全と防災フィールド 福山 めぐみ



2年半のフィールドワークを終え学んだ点として、居場所づくりには住民との信頼関係の構築、そしてただ話を聞く場を設けることが必要という2点が挙げられます。コロナ禍ではフィールドワークが行えず、吉川団地の住民の方々とは関わる事が出来ませんでした。その間に、団地側の自治会長が変わったことで、フィールドワーク先との関係にも変化が生じました。これを受け、例え直接会えないとしても間接的にリモートなどで関わりを持つべきだったと後悔しています。ただ、コロナ禍での論文学習により、居場所づくりには話を聞く場が必要であるということ学ぶことが出来ました。配属当初から現場に出向いていましたが、本来半年ほどは現場調査と論文調査による基礎的知識の確立に努める必要があると思いました。論文調査により、話を聞くだけの居場所は、人々の自己存在価値や社会的コミュニティとの繋がりを会話を通して持つことが出来るようです。そのような居場所づくりを今後行っていくべきだと思います。

県営団地フィールド 竹村 定朔



地域創造学環のフィールドワークにご協力いただいている 地域のみなさんの声をご紹介します！

地域創造学環のフィールドワークは、多くの地域の方々からご協力をいただいています。
今回は、様々なフィールドでお世話になっている方々から、これまでの活動についてお伺いしました。

※表記のご所属、お役職名等は2020年度のもの

清水港フィールド

人生を変えるかフィールドワーク？

地域には学生が関わり解決できる多くの課題がある。
地域に顕在化する課題のほか、学生の視点で掘り起こす潜在化する課題。
社会経済の潮流に対応する将来の課題など様々である。
今まで、地域は課題解決に不足する人手を学生に求めた。学生が地域にただで若々しい雰囲気に変えた。
しかし、コロナ禍と相まって先の読めない時代。地域は単に人手として参加する場から大学で学ぶ教養・専門知識、人・情報ネットワークなどを活かす場へと変化し、地域と学生が協働しながら、地域の価値創造を求め始めている。
学生の地域での存在価値はさらに高まった。
学生が地域にどのように参画するかは、心の持ち方ひとつ。
単位取得の場から人生を左右する学びの場になるかもしれない。

有限会社都市環境デザイン研究所 代表取締役 木村 精治 様



庵原フィールド

庵原フィールドワークのはじめの頃は、そのテーマや課題などが見いだせず、苦労していた時期もあったように思います。それゆえに連合自治会長のお宅を訪問した際は積極的な取材を行い、ただそこで考えを止めることなく、歩みを一步一步進めている姿勢が、地元との『つながり』を構築するきっかけになりました。地元産品販売の「庵原マルシェ」では、調査・取材の姿勢で臨んだものの、結局お買い物を楽しんでたくさんのお土産を持っていました。しかしこれは、対面販売により地元の方々とのコミュニケーションが図れたことの証でした。『つながり』の数が、人間力を大きく成長させることに『つながり』ます。この後も引き続き頑張ります。

公益財団法人静岡市まちづくり公社
健康スポーツ課 課長 酒井 政幸 様



駒形・おまちフィールド

静岡おまちバル実行委員会では、以前より大学生を実行委員会メンバーに迎え、ともに、イベント作りをして来ました。参加店舗の開拓、チラシやポスターによるPR、当日チケットの販売など。地域創造学環様との取り組みでは、もう1歩踏み込み、「学生メンバー発案によるミニバルの開催」を目指しました。コロナ禍により、残念ながら構想の実現は困難でしたが、バルイベントの重要ツールである「電子版バルMAP」の編集作業は、全員が初体験。1ページに、どんな情報をどのように配置するのか、だいぶ頭を捻ったようです。次年度はぜひ、「学生メンバーによるミニバル開催」を実現したいですね。今年度はそのための準備期間と捉えようと思います。

静岡おまちバル実行委員会 実行委員長 松下 和弘 様

浅間通り商店街フィールド

顧客も店主も年齢層が高いこの商店街をフィールドに選んでくれただけでも嬉しく思いましたが、はじめはお互いに少しぎこちないものでした。それが次第に、イベントへの参加などで交流が進み、自主的に考えてくれた活動が形になり、これからの時のコロナ禍でした。
イベントでの子ども向け企画では、参加者にも笑顔が溢れて、商店街は楽しくなくちゃ、ということをお互いに思い出させてくれました。商店街マップ作りでは、こちらからのキツイ注文にもめげず、どんどん仕上がっていく様子にパワーを感じました。これからも、アフターコロナも見据えての提案が実現し、元気をくれるみなさんの若い笑顔が商店街に届くことを期待しております。

静岡浅間通り商店街振興組合 理事 原木 公子 様



焼津市浜通りフィールド

焼津水産高校流通情報科では、静岡大学地域創造学環とのワークショップを受け入れさせていただいてから4年を迎えました。本年度はコロナ禍のため、思うような活動を行うことができませんでした。本学科では焼津に生まれ育ちながら焼津浜通りを知らない生徒が多くいます。この授業を通して知らなかった焼津の魚まち文化を知り、理解が深まったと思います。来年度、進路決定をする生徒にとって焼津の魅力を知り地元へ貢献し活躍をしてもらいたいと思います。今回、このような貴重な機会を与えてくださった太田先生をはじめ静岡大学地域創造学環の学生さんに感謝申し上げます。

静岡県立焼津水産高等学校 流通情報科 学科長 近藤 昌幸 様

コロナ禍で行動が制限され、今年度の活動も大幅に修正しなければならなくなり、計画していたことがあまりできず申し訳なく思います。そんな状況でも、リモート会議を何回か重ねて浜松文芸館の俳人君をバージョンアップし、ことばちゃんという新しい仲間も誕生しました。そして、浜松文芸館を訪れる子どもたちを対象とした企画として、ガチャ俳句用のチラシの図案化を行い、動く絵のクリアファイルの作製にも取り組むなど、とても楽しいものとなりました。浜松文芸館の願いは親子で来館した子供が親になったときに、また親子で来てくれることです。これからもよろしくお願い致します。ありがとうございました。

公益財団法人浜松市文化振興財団 浜松文芸館 館長 鈴木 隆之 様

浜松文芸館フィールド



佐久間町フィールド

食べることを通して佐久間を知ってほしいと思い、地元の食材を使った料理や伝統料理、健康安全なおやつなどを一緒に作ってきました。活動の中で、ごまのお菓子「ごまちゃん」の様々なバリエーションを考え、試作、試食、アンケートを実施して新しく「ごまビ」(ごまとピーナッツのお菓子)を完成させました。学生の若い感性や行動力に私たちはたくさんのパワーをもらいました。

昨年はコロナ禍で思うような活動ができませんでしたが、久しぶりに顔を見せてくれた秋の「ただいま。」という明るい声は何より嬉しかったです。
「ごまビ」を作ったときの企画力、行動力、コミュニケーション力を社会に出てからも発揮されることと思います。落ち着いたらまたいつでも顔を見せてください。みんなで待っています。

佐久間パンプキンレディース 川添 和枝 様

とうもろの里フィールド

驚いたチームワーク

コロナ禍が生んだ奇跡ともいえるべき事態が起こりました。
10月17日、今年度最初のフィールドワーク。はじめての1年生と2・3年生の隔たりが感じられなかったのです。
2・3年生は、ライングループをつくり、先生や私たちとの連絡をいつも以上に密に取り合い、1年生も次々と参加しました。
会えないからこそ、つなぎ合う姿勢がありました。
自己紹介は、みんな愛称で呼び合い、似顔絵を描きみんなのスキルを活かしながらチームの輪が出来上がっていました。
Keeymonは最高のチームです。

NPO法人とうもろの会 名倉 光子 様



御前崎市フィールド



御前崎市では、平成30年から学生のフィールドワークが始まり、サイクリングやマリンスポーツなど様々なイベントの企画、運営を体験していただきました。令和2年初めからの新型コロナの影響で御前崎市ではほぼ全てのイベントを中止し、大学の講義もオンラインとなった中で、新入生の市内視察のために久しぶりに御前崎市を訪れた時の学生たちの明るく前向きな姿に我々も大いに勇気づけられ、学生たちを受け入れて本当に良かったと思いました。御前崎市でのフィールドワークは、学生にとって大学時代に学び体験した貴重な財産であるとともに、市にとってもまちづくりを進めるための貴重な財産です。これからもより一層、静岡大学との関係を深め、まちづくりを進めて行きたいと考えています。

御前崎市役所 政策監 石垣 伸博 様

松崎町フィールド

静岡大学のフィールドワークの受入れを始めてから、5年の歳月が流れました。最初の学生はすでに社会人となり、活躍されていると伺っております。

松崎町におけるフィールドワークは、「観光と防災」「商店街の振興」の二つのチームが活動が続けていただいております。当町にいない世代の学生が町の中で活動する様子は、地域に活気を与えてくださっています。

今までの中で思い出はたくさんありますが、フィールドワークによって地域とのつながりができ、秋祭りのような地域密着の行事に参加し、また、スポーツ少年団の子どもたちに野球を教えたりしたことにより、地元住民に感謝され、頼りにされたことは学生にとっても良い経験だったのでは無いでしょうか。松崎での知見を踏まえ、社会に出て、他人のために行動できる人になって活躍していただければ嬉しいです。

松崎町企画観光課 課長 深澤 準弥 様



東伊豆町フィールド

コロナの影響で思うようにフィールドワークとしての活動をする事ができなかった一年間でしたが、メンバーとはオンライン上で地域とつながる可能性について様々な取り組みに挑戦してきました。

その結果、新たな地域との関わり方が見えてきた気がします。今後も状況が打開されるのを待つだけではなく、今できることに一緒に取り組んでいけたらいいなと思っています！

NPO法人ローカルデザインネットワーク 理事長 荒武 優希 様



ジオパークフィールド

コロナ禍での新しいスタイルの発見

今回、民間企業の伊豆バスへフィールドワークのお話を頂き、当初は学生さんと企業が上手くかみ合うのかという戸惑いがありました。コロナ禍の企業の状況を学生さんがどう感じるのか心配でもありました。新しい生活スタイルを題材に学生さん達の持っている発想とアイデアがとても新鮮でした。ワーケーション事業からワーク変換スタディとしてスタディーケーションという新しいスタイルが生まれ、また企業のベンチャー的な動きや失敗を恐れない姿勢や動きには深く感心感動致しております。西伊豆での秘境のわさび田でのドローンや強風の中でのVR360度の撮影等、待っているスキルを最大限発揮し、改善策を考える姿は大変刺激になりました。地域の魅力発見の多方面からの着眼を今後も期待致します。

株式会社伊豆バス 北田 美希子 様



県営団地フィールド

昨年度までは、学生の皆さんから吉川団地自治会役員の方々にイベントを提案・実施されてきましたが、コロナ禍の中で実施できない状況が続いています。

私が大学にお邪魔した昨年の11月、皆さんは、コロナ禍により従前の活動が出来ない間で、これまでの活動やフィールドワークについて振り返りをされていました。

当然のことながらフィールドワークを実施する現場は、そこで出会う方たちの日々の生活の場です。地域住民の方たちのご理解・協力がなければ、よりよいフィールドワークや活動につながっていきません。“住み慣れた地域で、誰もが安心してずっと暮らせるため”には何が必要なのか、柔軟な発想と行動力を生かして、今後も学びを深めていってください。

社会福祉法人静岡市社会福祉協議会
清水区地域福祉推進センター 赤堀 有加 様



静岡大学 地域創造学環 2020年度フィールドワーク報告会

日時 2021年5月27日（木）10：15～14：45

場所 静岡大学 大学会館 大ホール

【司会、舞台、オンライン配信スタッフ】

（地域経営）3年生 田崎 碧、2年生 太田 そよ香、納 壺成

（地域共生）3年生 伊藤 響、出木 美沙緒

（スポーツプロモーション）3年生 仲原 凧歩

【報告会リーフレット、報告書表紙デザイン】

（アート&マネジメント）3年 渡邊 紗也佳

※学年は開催時のもの（2021年度）

静岡大学 地域創造学環 2020年度フィールドワーク報告書

2021年5月20日発行

編集発行 国立大学法人静岡大学 地域連携推進課 地域創造学環係
